

# 第Ⅳ章 遺 物

## 1 木 簡

宮跡庭園遺跡の発掘調査で出土した木簡の総点数は102点である。その内訳は、1975年の調査（第96次調査）において、予備調査で14点、本調査で50点出土し、また1980年の調査（第121次調査）では38点出土している。木簡の出土遺構は、いずれの調査とも同一遺構の水路からであるが、その遺構を1975年調査の概報『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』（1976. 3刊）および1980年調査の概報『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』（1980. 3刊）では、発掘区外東方を南流する菰川より園池 SG1504 への導水路にあたる流路 SD1525 であると理解していた。ところが、それ以後の園池整備関連調査（1984. 2）により、この流路 SD1525 は園池への導水路ではなく、園池 SG1504 が奈良時代後期に造営されるときには、すでに廃絶され埋め立てられていたことが判明した。すなわち園池 SG1504 は、流路 SD1525 の堆積土上層の暗灰色粘土上面に石張りを施し、池周辺は茶褐色粘質土による整地を行なって造成されていることが確認された。平城京造営以前には、この地区には河川 SD1560 が南流していたが、その SD1560 がほぼ埋った状態になっていたのを、奈良時代に入って SD1560 の堆積土を切って、流路 SD1525 が設けられたごとくで、木簡はすべてその流路 SD1525 の堆積土下層から出土している。出土地点は、流路 SD1525 の上流から、1975年予備調査、1980年調査、1975年本調査となるが、1975年本調査部分が位置的に言えば、園池造成のとき園池に導水するために設けられた木樋への注水部分の直ぐ北にあたり、その位置で流路 SD1525 は蛇行していたようで、多量の加工木片や自然木片が堆積し、木簡も比較的まとまって出土している。出土層位は堆積土下層で、おおむね砂を混じえる暗灰色粘質土層であるが、底近くの灰黒色粘土からも出土している。

以下、出土木簡の主要なものについて述べる。なお各木簡の積文の右端にある数字は、木簡の寸法（縦×横幅×厚さ 単位 mmで、括弧を付してあるのは木簡が欠損していることを示す）、および木簡の型式番号である。なお、木簡番号に\*を付してあるものは第121次調査出土、それ以外は第96次調査出土木簡である。

出土木簡のうち削屑は5点と比較的少ない。年紀のある木簡は習書も含めて4点で、和銅3年（15）、5年（13）、7年（21・27）と和銅年間に限られ、また荷札などにみられる地名表記等の点からいっても、木簡はおおむね和銅頃のものと考えられる。

文書木簡では、米の進上・支給などにかかわるもの（1・2・3・9・10）が比較的多く、断片ではあるが万葉仮名を使用しているものもある（5・7）。また、貢進物荷札では、若狭（調塩、

1) 木簡の形態分類は15型式に分けられる。主なものとして6011型式：長方形の材、6019型式：一端が方頭で、他端は欠損にて原形不明のもの、6031型式：長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの、6032型式：長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの、6033型式：長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖らせたもの、6039型式：長方形の材の一端に切り込みがあるが、他端は欠損により原形不明のもの、6065型式：用途未詳の木製品に墨書のあるもの、6081型式：欠損により原形不明のもの、6091型式：削屑、などがある。詳しくは『平城宮木簡四 解説』を参照されたい。

- 13) や遠江 (14)・阿波 (16) のものがみられるほか、里名・人名のみのものが多い。なかでも注目されるのは、北宮と記載のある俵の荷札 (11・12) で、北宮への用物の荷札であろうが、充先を北宮に限定している点でとくに注目される。北宮との関係で、習書ではあるが長屋王願経 (和銅経) に関連すると思われる木簡 (25) や、また「封」の文字のある木簡 (23)
- \* もその用法に関心もたれる。木簡記載の用語に「御坏物」とみえ、北宮や「竹野王子」と記す木簡 (2) があり、官職名を記すものでは、断片ではあるが中務省がみられ (24)、また墨書土器に「侍従」「宮」があるなど、この遺跡と天皇家とのつながりを感じさせる。

## SD1525 出土木簡

- 木簡 1 (PL. 16) ・御坏物直米二升充奉  
\* ・受古女 九月三日 椋垣忌寸 (160) × 20 × 3 6019型式

上端は折損、その他は原形を残す。材の中央、下端近くに小孔を穿つ。「御坏物」は坏に盛った食物を尊んでいう場合の語句で、『播磨国風土記』賀古郡条に「又、江の魚を捕りて、御坏物と為しき」とあり、天皇の御坏に盛られた食物の意味である。御坏物の代米二升を充当したことを示す文書木簡である。椋垣忌寸については『続日本紀』和銅2年(709)正月に「正六位下椋垣忌寸子人」、また和銅6年4月に「従五位下倉垣忌寸子首」などがみえるが、椋垣忌寸子人は、慶雲4年(707)2月には「主税寮助従六位上椋垣直子人賜連姓」とあることにより、慶雲4年から和銅2年の間に連姓から忌寸姓になったことがしられ、この木簡もその賜姓以後となる。なお、『新撰姓氏録』にはその逸文(右京諸蕃坂上大宿禰条逸文)に「蔵垣忌寸」とみえる(佐伯有清『新撰姓氏録の研究 本文篇』p.360)。ヒノキ・板目材。

- \* 木簡 2 (PL. 16) ・竹野王子大許進米三升<sup>受稻積</sup>  
・ 六日百嶋 183 × 23 × 9 6011型式

四辺は整形面を残し、原形を保つ。下端近くに小孔を穿つ。竹野王子の許へ米三升を進上することに關する文書木簡。「稻積」は米を受取る人物か。裏面の日付と人名「百嶋」は、米を進上した日とその担当者であろう。大許の「大」は尊敬の意を示す。竹野王子は、明日香村高淵の龍福寺蔵の石造層塔の銘文にみえる「従二位竹野王」と同一の人物であろうか(『寧楽遺文 下』p.971)。銘文は損傷が著しく、ほとんど判読しがたいが、銘文末尾の年紀部分により(『明日香村史上巻』p.615, 621)石塔は、天平勝宝3年(751)4月に竹野王により建立されたとされる。なお、竹野王は聖武天皇の時代に非参議であったことが、『公卿補任』『一代要記』にみえる。すなわち『公卿補任』では、天智天皇10年(671)に生まれ、天平16年(744)従三位非参議、天平21年正三位になり、天平宝字2年(758)に「至于今年補任不詳 薨歟」とあり、また『一代要記』でも竹野王は従三位とみえる。そこで官位の点からみて、石塔銘文の竹野王は天平勝宝3年正月に従二位に叙された竹野女王とみる見解もある(『明日香村史 上巻』p.157)。ヒノキ・柁目材。

- 木簡 3 (PL. 16) ・符□□□<sup>〔充カ〕</sup>片岡部□三月□□□□ □□  
\* ・式斛陸斗伍升□□<sup>〔受カ〕</sup>□長□□古万呂 160 × (19) × 3 6081型式

左辺は割られているが、その他は原形をとどむ。「符」形式の文書木簡。某官司から、所轄

官司又は官人へ食料（米か）の支給を命じたもの。「古万呂」は担当者名。類似の用例として、平城宮木簡2775号（『平城宮木簡二』）があげられる。ヒノキ・斜桁目材。

木簡 4 (PL. 16) ・山田□ □□□目□ □ □  
・右件□ □ □ □月十五□使 (236) × 21 × 5 6019型式

下端は折れ、その他は原形を残す。表裏とも材の腐蝕が著しい。文書木簡。ヒノキ・板目材。 \*

木簡 <sup>\*</sup>5 (PL. 16) 御帳□辛櫛入<sup>奈加良</sup>進出 (124) × 29 × 3 6081型式

上下端は折損、左右辺は整形面を残す。「奈加良」は万葉仮名。辛櫛に入れられた御帳を進納した文書木簡。ヒノキ・板目材。

木簡 6 (PL. 16) 海上採□□□ (78) × (18) × 2 6081型式

上端は円弧に削り、右辺は削りにて調整。左辺は割れ、下端は折れにて欠損。上総あるいは下総の海上郡出身の采女に関する木簡。采女は、郡単位で、郡少領以上の姉妹や女で形容端正なものが貢進され、後宮の水司（6人）、膳司（60人）などに配属された（後宮職員令）ほか、縫司や縫殿寮に配属されたものもあった。奈良時代においては采女の称呼法は国名は省略することはあっても、郡名だけは省略せず采女に付すのが原則であったとされる（磯貝正義『郡司及び采女制度の研究』p.186）。ヒノキ・桁目材。 \*

木簡 <sup>\*</sup>7 (PL. 16) ・売斐  
・止為故長 (52) × 24 × 2 6019型式

上端・左右辺は原形を残すが、下端は折損。文書木簡の冒頭にあたるか。「止」は万葉仮名。ヒノキ・斜桁目材。

木簡 <sup>\*</sup>8 (PL. 16) □後又意富<sup>〔若カ〕</sup>□□□ (197) × 24 × 5 6081型式 \*

左右辺は整形面を残すが、上下端は折れにて欠損。文書木簡。ヒノキ・桁目材。

木簡 <sup>\*</sup>9 (PL. 19) ・従二升□□□升□□□三升□□四升半  
・右一斗五升 四月廿三日 □末呂 261 × 44 × 4 6011型式

四辺に整形面を残す。下辺に小孔を穿つ。米の支給に関する文書木簡。「右一斗五升」は米の総計を示し、また末尾に支給日および支給担当者を記すか。ヒノキ・板目材。 \*

木簡 <sup>\*</sup>10 (PL. 18) ・四月十四日紀<sup>〔若カ〕</sup>□□進米二升  
□ 185 × 18 × 4 6011型式

完型。米二升進上に関する文書木簡。ヒノキ・桁目材。

木簡 11 (PL. 17) ・鴨郡□  
・北宮俵□ (86) × 19 × 4 6039型式 \*

下端は折損、上端・左右辺は原形を保つ。上部は圭頭状。某国鴨郡から北宮へ用物の俵を貢進したときの荷札。俵とあることからみて穀物か。鴨郡（賀茂郡）は参河・伊豆・美濃・佐渡・播磨・安芸の諸国にみえる。ヒノキ・板目材。

北宮は、和銅5年（712）の長屋王願経（滋賀・太平寺等に分蔵）の奥書に、

「藤原宮御寓 天皇以慶雲四年六月十五日登遐三光慘然四海過密長屋殿下地極天倫情深福報  
 乃為 天皇敬写大般若經六百卷用尽酸割之誠焉  
 和銅五年歲次壬子十一月十五日庚辰竟  
 用紙一十七張 北宮 』

\* とみえる。この長屋王願經（和銅經）は、当時従三位式部卿であった長屋王が、室吉備内親王の兄にあたる文武天皇の崩御を悼んで、その追善のために発願したもので、ここにみえる北宮は吉備内親王の宮といわれ（岸俊男「鴨々雑考」）、そこで大般若經600巻の書写が行なわれたものであろう。慶雲末年から書写が開始されていれば、この北宮は藤原京所在となり、また和銅5年直前に書写されたものとすれば平城京所在となる。

\* なお、神亀3年（726）の山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳（大日本古文書 編年1—p.364）に北宮帳内として、同里から出仕したもののいることがしられ、平城宮の時代にも北宮が存在していたことが確認できる。

木簡 12<sup>\*</sup> (PL.17) ・阿須波里□□  
 ・北宮御物俵□□ (87) × 23 × 4 6039型式

\* 左右辺・上端は整形面を残す。下端は折損。11と同じく、北宮への貢進物につけられた荷札。阿須波里は、『和名鈔』では越前国足羽郡、越後国沼垂郡にみえる。

11・12はともに鴨郡や阿須波里から北宮への貢進物の荷札であるが、いわゆる調庸の荷札とは記載書式が異なり、国名の記載を欠くことや、充先を北宮に限定し、「御物」との表記を使っている点など注目される。スギ・板目材。

\* 木簡 13 (PL.17) ・若□国<sup>小丹生郡野里</sup><sub>中臣部平万呂御調塩</sub>三斗  
 ・和銅五年十月 172 × 21 × 5 6031型式

上端切り込み部分の右端を欠くほかは完形。墨痕は非常に薄い。若狭国からの調塩の貢進物荷札。遠敷郡野郷野里からの調三斗（品名記載はないが、同じく塩か）の荷札が、平城宮木簡347号（『平城宮木簡一』）にもある。和銅6年（713）5月の「畿内七道諸国の郡郷名には好き字

\* を著けよ」との制の直前にあたり、「小丹生郡」の表記は今のところ唯一の例である。スギ・枳目材。

木簡 14<sup>\*</sup> (PL.17) ・遠江国石田郡□□ □□万呂  
 ・五斗 122 × 17 × 5 6033型式

完形。遠江国石田（磐田）郡からの貢進物荷札。五斗とあることからみて白米の付札と考えられるが（『平城宮木簡一 解説』p.59）、遠江国は延喜民部式の年料春米輸貢国のなかにはみえない。ヒノキ・板目材。

木簡 15<sup>\*</sup> (PL.17) ・和銅三年四月十日阿刀  
 ・部志祁太女春米 109 × 20 × 3 6032型式

左右辺・上端は整形面を残す。下端は刃物により表面から切断されているが、完形とすべき  
 \* か。春米につけられた付札。書き出しに年紀をかく例は、藤原宮出土木簡にみられ、時代的に



上端・左辺は削りによる調整面を残す。右辺は割られ、下端は二次的な削りによる整形がされている。裏面には墨痕はない。

材の上端近くと中央部や下に切り込みがあり、その部分に「封」の文字をかく。切り込みの部分で紐等にて何かにくくりつけ、紐の上から「封」の文字をかいたもので、紐跡の部分には墨痕は残っていない。なお「封」の文字のある木簡は、宮跡庭園遺跡近くの平城京左京二条二坊の発掘調査で二条大路北側溝からも出土しており（『木簡研究7』p.15・図版4、1985,11刊）、ともに文書もしくは荷に付けて封としたものと考えられる。ところで平城宮跡出土の木簡でも「封」の文字のあるもの（平城宮木簡2726号、『平城宮木簡二』所収）もみられるが、この場合は文書木簡の余白部分に書き加えられたもので、「以上」「以下余白」の意を表わしたとされ

\*（弥永貞三「古代史料論木簡」、『新・岩波講座日本歴史25』所収）、本木簡とは意味が異なるものである。なお、中国では文書木簡を送付する場合に、もう一枚同じ大きさの木簡を上重ねて（この木簡を「檢」という）紐でしばりつけ文書の内容を他見されないようにする場合があることがしられるが、その場合に檢には充所を上書きし、紐の部分に封の部分に封とは墨書しないようである（大庭脩『木簡』p.27）。ヒノキ・板目材。

\* 木簡 24 (PL.18) 中務省少録□□□ (138) × (10) × 3 6081型式

上端は整形面を残す他、左右辺は割れ、下端は折れにて欠損。少録の下は欠損にて読み切れない。ヒノキ・板目材。

木簡 25 (PL.19) ・五百冊二  
一校授

\* ・ 二百七十 冊  
旦 (173) × (50) × 15 6081型式

剝離した部厚い木屑状の木片に墨書されている。習書木簡。「五百冊二」等の数字は写経風の文字でかかれており、大般若経の巻次を示すか。とすれば大般若経である長屋王願経（和銅経）との関係も考えられようが、長屋王願経は巻次により種々の書風を示すため、本木簡の

\* 筆跡との関連は確定はできない。ヒノキ・板目材。

木簡 26 (PL.19) ・棕部智麻呂 高橋善麻呂 越 越  
・身身身 □□ 人々人々人々人□ 214×25×6 6011型式

上下端とも刃物にて切断され、左右辺は割截されている。習書木簡。人名については不詳。ヒノキ・板目材。

\* 木簡 27 (PL.18) ・和銅七年七<sup>〔和カ〕</sup>□□□和<sup>〔和カ〕</sup>銅七□  
・ 和銅□□□月□□□ □ □ (192) × (17) × 4 6081型式  
〔四カ〕 〔廿カ〕

上端・左辺は調整面を残すが、右辺は割り、下端は折りにて欠損。「和銅七年」の年紀をしるす習書木簡。ヒノキ・板目材。

木簡 28 (PL.18) ・「<sup>〔別筆〕</sup>□ □ 日□七□七□ □」

\* 首徳万呂



## 2 瓦 埴 類

3次にわたる調査によって出土した瓦埴類は、軒瓦が合計163点、文字瓦19点、埴69点、面戸瓦11点、熨斗瓦1点、丸瓦・平瓦が整理箱273箱分である。軒瓦の内訳は軒丸瓦14型式14種52点、軒平瓦9型式18種81点、型式種別不明軒丸瓦18点、同軒平瓦12点である。これらの概要\*については、すでに調査回数ごとに概報で報告している。今回はこれらをまとめて軒瓦、丸瓦・平瓦、文字瓦、道具瓦、埴の順に述べるが、軒瓦については、型式や数値に先の概報と変更の生じたものがある。

出土した軒瓦163点を1aあたりに換算すると約2.9点となる。平城宮内の出土量<sup>1)</sup>(内裏北外郭 17.7点、朱雀門周辺 5.7点、内裏内郭 5.1点、推定宮内省大膳職 5.0点、推定馬寮 3.0点)と比べると少ない。しかし平城京内では、左京二条二坊十二坪<sup>2)</sup> 14.3点、左京二条二坊十三坪<sup>3)</sup> 10.6点、左京三条一坊十四坪<sup>4)</sup> 3.0点、左京一条三坪十五・十六坪<sup>5)</sup> 2.7点、左京三条二坊十・十五坪<sup>6)</sup> 1.2点、左京五条二坊十四坪<sup>7)</sup> 1.3点、左京三条四坊七坪<sup>8)</sup> 0.8点と、数値に大きな開きがあるとともに、瓦埴数の出土量が極めて少量もしくはまったく出土しない地域もある。調査地の性格や坪内での位置の違いによってこうした差が生じるものと思われる。

\* 軒瓦の記述に当っては、本調査出土遺物だけでなく、宮・京における他の調査で出土した残りの良い資料をも考参にし (Fig. 28, 33)、各型式・種別の特徴を記すにとどめた。詳しくは、『平城宮調査報告Ⅰ～Ⅻ』、『基準資料 瓦編 1～9』を参照されたい。ただし、瓦当裏面の調整手法、丸瓦・平瓦の接合法などの製作手法は、本調査出土遺物において観察された結果を記し、破損などによって観察不可能な場合は記述を省略した。また、焼成や胎土の記述は観察によって得た相対的な基準により、焼成は優・良・可の3段階に分ける。焼成優とは、灰黒色～灰色を呈し、須恵器に似た堅緻な質のもの。焼成良とは、灰白色～灰色を呈し、いわゆる瓦質に近いもの。焼成可とは、灰白色～黄灰色を呈し、軟質のもので、磨滅によって瓦当紋様や成形・調整手法の弁別が困難な例が多い。胎土については、砂粒をほとんど含まない精良なものと、砂粒を含むものとは大きくわけ、砂粒を含むものについては、砂粒の大きさを記述した。

\* 軒瓦の弁数・珠紋数・鋸齒紋数や細部の計測値は巻末の別表にまとめた。

### A 軒 丸 瓦

#### I 単弁蓮華紋軒瓦

**6133型式** 間弁がなく、弁と弁が接するとともに、外区外縁に鋸齒文がないのが特徴である。

A～D、I～Pの12種に細分され、C種が出土。C種はA種に似て弁端が尖がりぎみとなる

\* が、A種が12弁、蓮子1+5、珠紋13に対して、C種は13弁、蓮子1+6、珠紋18となる。

1) 『平城宮調査報告Ⅻ』1985, p. 69。

2) 奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪 奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』1984, pp. 22～27。

3) 『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』1984, p. 26。

4) 『年報 1968』1967, p. 39。

5) 『平城宮調査報告Ⅵ』1974, pp. 33～37。

6) 『平城京三条二坊』1975, pp. 19～24。

7) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告 昭和54年度』1980, pp. 14～19。

8) 『平城京左京三条四坊七坪 発掘調査概報』1980, p. 17。



範全体に厚さ 1.5~2.0 cm ほどに粘土を詰め、その後丸瓦を接合する。丸瓦は瓦当部よりやや小ぶりで、接合部外面に多量の粘土を補う。接合部内面の粘土は比較的少なく、接合線は円弧を描く。丸瓦接合後瓦当裏面を強くナデ、中央部を窪ませている。胎土精良。焼成良。外面は灰黒色、断面は灰白色。C種 1 点、種別不明 4 点が出土。

**6134型式** 中房がわずかに窪む。内区に間弁を伴ない、外区外縁が線鋸歯紋となるのが特徴である。A~D種の4種に細分され、B種が出土した。B種は9弁で、間弁が中房にとどかず楔形となる部分がある。弁区はわずかに盛り上がる。弁は断面三角形の太い輪郭線で区画し、子葉や間弁は高く突出する。

瓦当裏面は強くナデているようである。胎土精良。焼成良。外面・断面とも灰白色~灰褐色。B種 2 点が出土。内 1 点には、赤褐色に変色した部分がある。

**6138型式** 弁端が丸みを帯び、楔形の間弁を配するのを特徴とする。A~C、E~K<sup>1)</sup>の10種に細分され、B種が出土。B種はA種に似るが珠紋が大ぶりで、弁の大きさが不揃いである。A種が素紋があるのに対し、外区外縁は線鋸歯紋となる。

6133型式と同様に、瓦当径よりやや小ぶりの丸瓦をあてる。接合粘土を多量に用いるため、接合線は低い円弧を描く。瓦当裏面は強くナデる。胎土精良。焼成良。外側灰黒色、断面灰色。1 点出土。外区外縁の 2 個所に赤褐色に変色している部分がある。

## II 復弁蓮華紋軒丸瓦

復弁蓮華紋軒丸瓦は、弁と間弁との関係によって、間弁が独立するA系統、間弁が界線状に弁をめぐるB系統、間弁のないC系統にわかれる<sup>2)</sup>。以下に述べる 6225・6235・6272・6274・6279・6348型式がA系統、6282・6284・6285・6314型式がB系統、6316型式がC系統に属する。

**6125型式** 中房が大きく、外区外縁が凸鋸歯紋、同内縁が圏線となるのを特徴とする。A~E、L<sup>3)</sup>の6種に細分され、E種が出土した。E種は瓦当が平板で内区の地の盛りあがり少ない。弁端が丸みをおびる。今回出土したものには、子葉と輪郭線との間に明瞭な筋キズが認められる。胎土にやや砂粒がまじる。焼成可。外面・断面ともに黄灰色。1 点出土。

**6235型式** いわゆる東大寺式軒丸瓦である。中房はわずかに窪む。弁は照り起りが強く、間弁はT字状で先端が弁に接する。外区内縁に大ぶりの珠紋をめぐらし、外区外縁は素紋の傾斜縁である。A~Nの13種に細分される。今回出土したものは瓦当の磨滅が著しく、種別を識別しにくい、B種である可能性が高い。B種はA種に似るが、やや小形である。A種同様外区内縁と外縁の境に段がつく。胎土精良。焼成良。外面灰黒色、断面黄灰色。1 点出土。

**6272型式** 中房に1+4+8の蓮子を配し、外区外縁は内縁より一段高くし、面違鋸歯紋をめぐらすのを特徴とする。A・B 2種に細分され、A種が出土した。A種は中房が大きく突出している。子葉・間弁が太く、外区内縁の珠紋も大きい。胎土精良。焼成良。外面・断面ともに暗黄灰色。1 点出土。

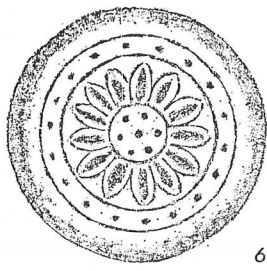
**6274型式** 中房は大形で突出する。弁は盛り上がり先端部で強く反るのが特徴である。A・B 2種に細分され、A種が出土した。A種は弁の照り起りが強く、外区外縁の線鋸歯文下端に凸

1) 奈良市教育委員会『平城京出土軒瓦型式一覧 I』1985, p. 1.

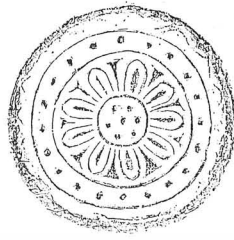
2) 『平城宮調査報告 XI』1981, p. 117. 『平城宮

調査報告 XII』1985, p. 73.

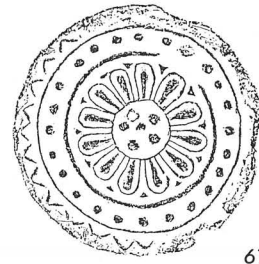
3) 『平城宮出土軒瓦型式一覧補遺篇』1984, p. 9. 『平城宮調査報告 XII』1985, p. 72.



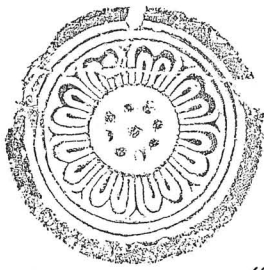
6133C



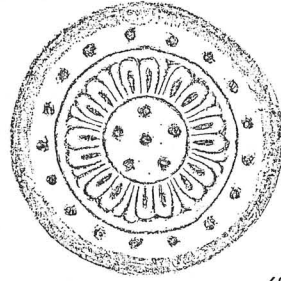
6134B



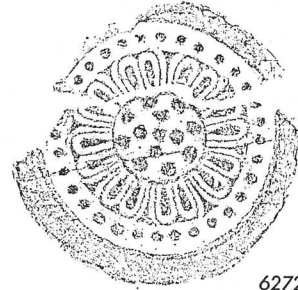
6138B



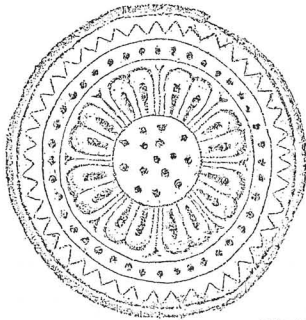
6225E



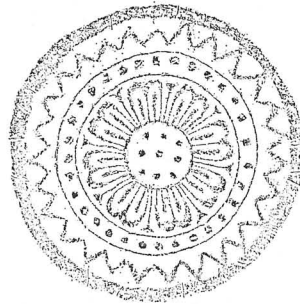
6235B



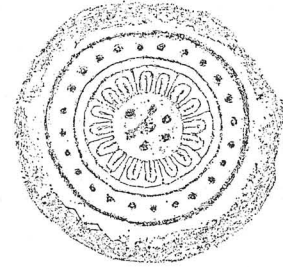
6272A



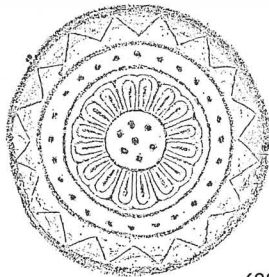
6274Ab



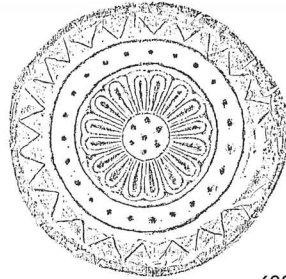
6279A



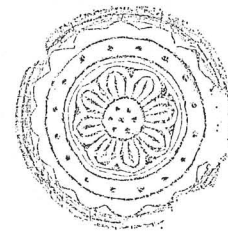
6282Bb



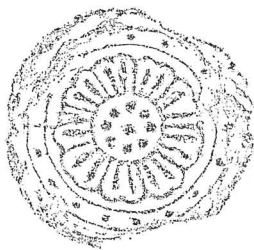
6284C



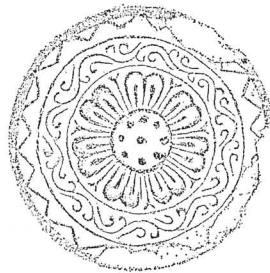
6285A



6314A



6316K



6348Aa

Fig. 28 軒丸瓦 (瓦当紋様標式例%)

線がめぐる。A種は笥の彫りなおしによってA a～A cの3者があり、A b種が出土。A b種はA a種にあった蓮子をめぐる円環が痕跡程度に消滅し、蓮子を小さく彫りなおす。

粘土接合痕の観察から、笥への粘土の詰め込みの様子がわかる。まず笥の外区外縁部に粘土を詰めたのち、外区内縁から内側の部分に約1.5cmの厚さに粘土を詰める。次に丸瓦をあて、丸瓦部凸面に接合粘土を置くとともに、瓦当裏面全体に約1.7cmの厚さに粘土を詰め平滑にする。その後接合部内面を円弧状に一回ナデたあと、瓦当裏面全体を斜めにナデる。丸瓦接合位置は高く、接合粘土も少ないため、接合線は高い円弧を描く。胎土精良。焼成優。外面・断面ともに暗灰色。SG1504の敷石抜き取り穴から出土した破片と近くの包含層から出土した破片が接合した。1点出土。

**6279型式** 6274型式とともに藤原宮式の軒丸瓦である。6275型式に似るが、中房が小さく、蓮子が一重にめぐる。A～Cの3種に細分され、A種が出土した。A種はB種に比べ弁端の反転が弱く、蓮子の配置が特徴的である。中心蓮子のまわりを方形にかこむように8個の蓮子が配置される。外区外縁は高く、線鋸歯紋は太く粗い。外区外縁上面にわずかに段がめぐる。

笥へ粘土を詰める順番は、外区外縁部分が最初である。瓦当裏面は横方向にナデて平滑にする。胎土精良。焼成良であるが、藤原宮式のなかで比較すると軟質のものが多い。表面灰黒色、断面灰色。4点出土。このうちの2点には二度押しによると思われる瓦当紋様のズレが認められ、細部の特徴も一致するところから同一個体である可能性が高い。

**6282型式** 以下に述べる6282型式、6284型式、6285型式は間弁B系統で外区内縁が珠紋、外区外縁が線鋸歯文となる。6282型式はA種を除いて中心蓮子が他の蓮子より大きく、外区内縁と外縁とを区画する界線が太いのが特徴である。A・B・D～Lの9種に細分され、B種が出土。B種は弁がそれぞれ独立し短小である。B種は笥の彫り直しによって、さらにB a・B b種に細分され、B b種が出土した。B b種は中房と弁区との間の圏線がなくなる。弁を一部彫り直しているため、弁と弁が接する部分がある。また中心蓮子とまわりの蓮子とが笥キズによって連結したのが見られる。今回出土した6282型式B b種は瓦当面の残りの悪いものが多く、出土品すべてについての笥キズの観察は不可能であった。残りの良い2点について見ると、中房の中心蓮子と周囲の蓮子との間3個所で笥キズが認められるとともに、間弁と子葉が中房に接する部分が一体となった状態の笥キズが2個所に認められる。

丸瓦の接合位置は低く、接合部の内外面に厚い接合粘土を用いる。そのため接合線は低い台形を呈する。接合部外面は縦にヘラケズリを行なう。接合部内面は瓦当裏面から5～8cmの幅で横方向のヘラケズリが行なわれる。そのため、ヘラ先端によるものと思われる浅い溝が接合線に添ってめぐる。接合粘土の末端部近くは、指頭によって強くナデている。

胎土は精良なものが多いが、一部に砂粒を含むものがある。焼成良。外面は黒色と灰白色のものがあるが、いずれも断面は灰白色～灰色。B b種6点、B種で細別不明のもの2点、種別不明のもの2点が出土。

**6284型式** 中房が小ぶりで中心蓮子が他の蓮子と同じ大きさである点で6282型式と区別される。A、C～G、Lの7に細分され、C種が出土した。C種は弁が平板で、中房は弁区よりわずかに突出するが、盛りあがらない。

今回出土したものは、丸瓦部が瓦当上半部の外区とともにはがれた状態で、丸瓦の接合方法

がわかる。また瓦当面に粘土の継ぎ目が観察でき (Fig. 32), 範への粘土の詰め込み過程が判明する。まず外区外縁に粘土を詰め、外区内縁から弁区までの部分をおよそ複弁1単位を目安に粘土を順次詰めていく。本例は9回にわけて詰めている。最後に中房部分に粘土を詰める。丸瓦を置くとともに、内面に接合粘土を詰める。丸瓦広端部にはキザミやケズリなどの加工は施さない。この後瓦当裏面に厚さ 2.5 cm 前後に粘土を詰め、瓦当を厚くするとともに接合部内面の支えとする。6282型式と比べると丸瓦の接合位置が高く、接合用粘土が少ないため、接合線は円弧を描く。胎土は細かい砂粒を含むものの比較的良。焼成良。外面灰黒色。断面灰色。1点出土。

**6285型式** 6284型式と似るが、6284型式より弁が長く、中房が小さい点で区別される。A・Bの2種に細分され、A種が出土した。A種は弁区の盛り上がり強く、中房がわずかに突出する。

瓦当製作の順は、まず範の外区外縁部分に粘土を詰め、次にそれ以外の部分に厚さ 1 cm 前後に粘土を詰める。その場合大まかではあるが外区内縁と弁区以内との部分に分けて粘土が詰められている。こうして範に一樣に粘土が詰められた後、丸瓦を立て内外面に粘土を補填する。丸瓦の広端部凸面には斜めに大まかなキザミを入れる (Fig. 31)。先端部にはケズリなどは

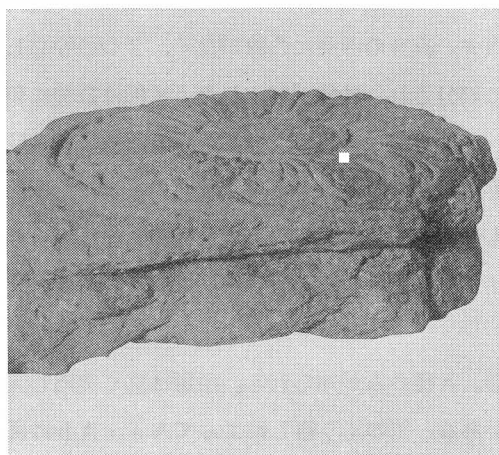


Fig. 29 6285型式A種 瓦当製作時の粘土継ぎ目

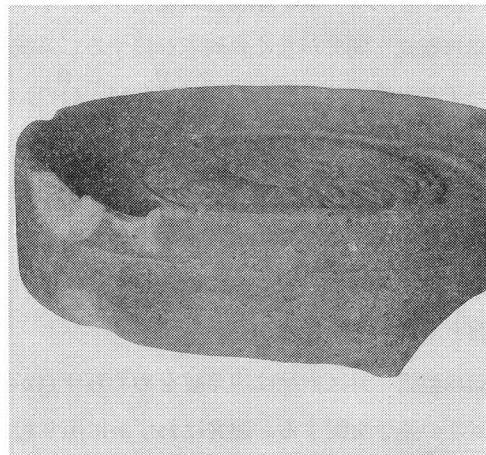


Fig. 30 6285型式A種 範端痕

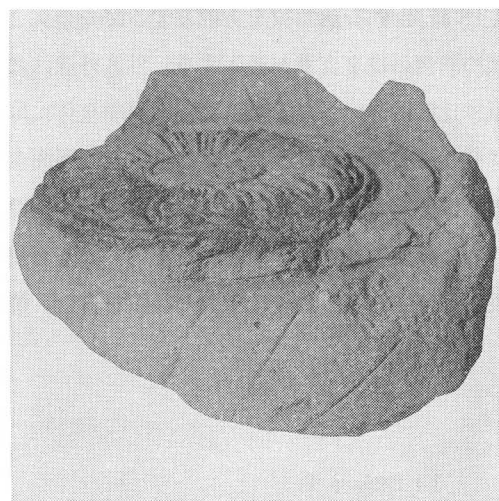


Fig. 31 6285型式A種 丸瓦凸面のキザミ



Fig. 32 6284型式C種 瓦当面の粘土継ぎ目

行なわれず、瓦当裏面にも溝を切るなどの加工は施していない。丸瓦接合後、瓦当裏面全体に約 2 cm の厚さに粘土を詰める。さらに接合線に添って少量の内面接合粘土をあてナデている。丸瓦の接合位置は比較的高いが、外面接合粘土は多い。また内面接合粘土は少ないが、瓦当裏面をえぐるように削っているため接合線ははっきりしない。接合部外面は縦にヘラケズリを行なう。瓦当側面も縦方向にヘラケズリをするものが多い。瓦当側面の外縁上面から 1.6 cm の位置にわずかな段が観察され、範端痕と考えることができる。今回の資料にはヘラケズリによって範端痕の残るものが少ないが、歌姫西瓦窯出土の6285型式A種には、この部分に明瞭な段のつくものがある (Fig. 30)。瓦当裏面は縦に強くヘラケズリを行ない窪ませている。胎土は細かな砂粒を多く含み、数 mm 大の砂粒も少量まじる。焼成優、灰色～暗灰色を呈するものが多いが、灰褐色を呈し焼成可に分類されるものも破片で6点認められる。A種が16点出土した。外区外縁だけの破片が6点あり、焼成などから見てA種であろう。

**6314型式** 復弁4弁の小形軒丸瓦。A～Eの4種に細分され、A種が出土した。A種は6314型式中最大で、弁は盛りあがり強く、弁端がやや尖がる。内区・外区を画する界線と弁の間に細い圈線をめぐらす。外縁上面に凸線をめぐらす。胎土精良。焼成良。外面灰褐色。断面灰白色。弁区の一部が赤褐色に変色する。1点出土。

**6316型式** 間弁がなく弁同志が接するC系統の復弁。復弁の中央に凸線がなく、2つの独立した子葉を輪郭線が囲む。A～K, M, O<sup>2)</sup>の13種に細分され、K種が出土した。K種はD種に類似し9弁であるが、D種に比べ中房がやや窪み、弁形が整一でない。弁区から外区外縁にかけて範キズが多く、また外区内縁の珠紋が両側の界線に接するものが多い。丸瓦の接合位置は比較的高いが、多量の接合粘土が用いられるとともに、接合部内面をナデるため接合線ははっきりしない。表面の磨滅のため調整手法は不明。胎土には少量の砂粒を含む。焼成良。外面・断面とも灰白色。1点出土。

**6348型式** 外区内縁に唐草紋をめぐらす点の特徴。A種のみが知られる。中房は高く突出し大ぶりの蓮子を配する。蓮弁はわずかに照り起りがある。範の彫り直しによってA a・A bに細分され、A a種が出土した。A a種は中房が突出するが、A b種では範を彫り直し、弁が中房から弁端に向って傾斜する。弁端はA b種に比べやや反り上がる。唐草紋は反時計回りで、18単位ある。唐草紋の基本的な構成は、右から左へ展開する唐草紋を主紋とする6643型式と同一である。茎は高くうねりながら連続する。茎の両側には2支葉が派生する。外区外縁は低い傾斜縁で粗い線鋸歯紋がめぐる。丸瓦接合位置は比較的高い。丸瓦接合後瓦当裏面全体に厚さ 1.0 cm ほどに粘土を詰める。接合部内面には特に接合粘土を置くことはなく、瓦当裏面全体に詰めた粘土を内面のささえとする。瓦当裏面には粘土を詰めたときの指頭圧痕と、接合線に添った円弧状のナデ痕が観察される。接合部外面には比較的多量の接合粘土を置く。瓦当側面の外縁上面から 0.9 cm の位置に、わずかな段が観察される。胎土は少量の砂粒を含む。焼成良。外面灰黒色、断面灰白色。1点出土。

1) 『平城宮出土軒瓦型式一覧 補遺篇』1984,

p. 27。『平城宮調査報告Ⅻ』1985, p. 78。

2) 奈良市教育委員会『平城京出土軒瓦型式一覧

Ⅰ』1985, p. 4。

3) 『平城京左京四条二坊十五坪発掘報告』1985, p. 30。

## B 軒 平 瓦

### I 偏行唐草紋軒平瓦

**6641型式** 内区の主紋は左から右に流れる唐草紋で、上外区に珠紋、下外区・脇区に線鋸齒紋を巡らせるのが特徴である。A, C, E~K, L, N, Oの12種に細分され、C種が出土した。

- \* C種は茎の基点が反転せず、遊離した2支葉を置く。8回反転し、茎末端は反転して納めるが支葉は配さない。支葉には、2個とも茎から遊離するa類、1葉が遊離し末端が茎と平行するb類、2葉とも遊離し末端が茎と平行するc類の3類がある。脇区の線鋸齒紋は下外区の線鋸齒紋とは連続しない。段顎。

平瓦部凹面の瓦当寄りを、約3cmの幅で横方向にヘラケズリする。胎土精良。焼成良。外

- \* 面灰黒色。断面灰色～灰黄色。3点出土。

### II 均整唐草紋軒平瓦

**6663型式** 6663型式・6664型式・6667型式型式は、花頭形を下から上へ巻き込む唐草で囲んだ中心飾をもつ。6663型式は唐草が3回反転し、内外区のさかいに2重圏線をめぐらせるのが特徴である。A~F, H~Nの13種に細分され、F・J種が出土。F種は唐草紋が外区との界線から立ち上がり、第3単位主葉と第1支葉の先端が脇区界線に接しないで巻き込む。J種はF種と同じく唐草紋が外区との界線から立ち上がるが、紋様がやや太い。中心飾の花頭は扁平で中心葉が横長となる。今回出土したものは、F・J種ともにすべて曲線顎である。

- \* 胎土に数mm大の砂粒を少量含み、焼成良で、外面・断面とも灰白色～黄灰色を呈するものと、胎土に細かな砂粒を多く含み、焼成優で、外面灰黒色、断面灰色を呈するものの2種がある。後者はF種の1点だけで、あとはすべて前者に属する。後者は硬質な焼成のため表面が良好に残る。平瓦部凹面は瓦当面より4cmの幅で横方向にヘラケズリし、平瓦部凸面は顎から平瓦部にむかって縦に強くヘラケズリを行なう。F種7点、J種1点出土。

- \* **6664型式** 唐草は3回反転する。6663型式と異なり、外区と脇区を珠紋とするのが特徴である。A~D, E~Pの15種に細分され、C・D・F種が出土。C種は中心飾の花頭基部が細く、上端で開き界線に接しない。主葉や支葉の巻き込みが強い。珠紋が比較的大きい。D種とF種では、中心飾の花頭基部が開かず平行線で表現される。D種では花頭がやや左へ傾き、F種ではやや右へ傾く。D種もF種も唐花紋が他の6664型式より太い。外区の珠紋はD種に比べF種の方が粗である。F種にはかろうじて外縁が残り直立縁である。段顎。胎土精良。焼成向。外面灰黒色、断面灰白色。C種1点、D種1点、F種2点出土した。

- \* **6667型式** 唐草は4回反転で、外区、脇区ともに珠紋をめぐらすのが特徴である。A・Bの2種に細分され、A種が出土した。中心飾の花頭基部は細く上端で開く。唐草は大ぶりで、唐草基部が界線につかない。瓦当面には筈の木目痕と思われる横方向の細隆線が浮き出るものがある。外縁は3段に立ち上がる直立縁である。『基準資料Ⅶ』では、曲線顎のものと外縁上面に縄目のあるものが紹介されているが、今回出土したものはすべて段顎で縄目は見られない。

- \* 顎面と平瓦部凸面の瓦当寄りは横ナデで調整する。平瓦凸面のナデは瓦当近くに限られるため、顎のごく近くまで縦方向の縄叩き目が残る。縄目は3cm当たり11本のもの（後述するa3

1) 『飛鳥・藤原宮調査報告Ⅱ』1978, p.39。『平城宮調査報告Ⅻ』1985, p.79。

種)が多い。平瓦部凹面は瓦当寄に幅約 2 cm の横方向のナデを行なうが、それ以外の部分は縦方向のナデによって布目を消している。

焼成や胎土から 3 類に区分できる。

1 類. 焼成優。須恵質の堅緻な焼成を示すもの。胎土にやや砂粒が含まれる。外面暗灰色、断面灰色。 \*

2 類. 焼成良。胎土は精良であるが若干砂粒を含む。外面灰黒色、断面灰白色のものと、外面・断面ともに灰白色のものがある。

3 類. 焼成可。胎土に 数 mm 大の砂粒を少量含む。外面灰黒色、断面黄灰色のものと、外面・断面とも黄褐色、断面灰色のものがある。

3 類は 1 類・2 類に比べ範キズの進んだものが多く、平瓦部凹面の側縁に幅の広い面取りを施すとともに、外縁をケズリ、平坦にする。1 類・2 類・3 類それぞれ 13 個体ずつ、計 39 個体が出土した。ただし 1 類は堅緻な焼成のため完形や大形の破片が多い。 \*

**6671 型式** 細長い菱形の中心飾を有し、これを唐草が上から下へ巻き込むのが特徴である。唐草は 3 回反転する。外区が内区より一段高く、下外区は線鋸歯紋である。上外区・両脇区の珠紋は杏仁形に近いものが多い。A～E, I～K の 8 種に細分され、K 種が出土した。K 種は D 種に似ており、唐草が主葉と 2 支葉からなり、内区両端の遊離した小支葉がない。D 種と異なり唐草紋が細い。今回出土したものの瓦当部は外区までで、外縁がない。段顎と直線顎が知られるが、出土したのは段顎である。胎土精良。焼成良。外面・断面とも灰白色。1 点出土。 \*

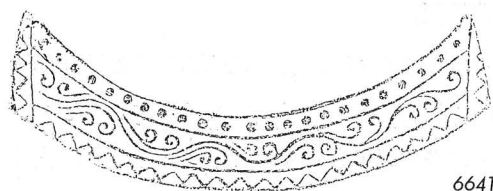
**6675 型式** 「小」字形の中心飾が特徴で、これを唐草が下から上へ巻き込む。唐草紋は連続し 4 回反転する。第 2 支葉は第 1 単位を除き小さい。上外区に珠紋、下外区と脇区には線鋸歯紋を巡らす。A 種のみ。段顎。胎土精良。焼成良。外面灰黒色。断面暗灰黄色。1 点出土。 \*

**6691 型式** 三葉形の中心で飾を有し、これを唐草が下から上へ巻き込むのが特徴である。唐草は 4 回反転し界線に接しない。外区、脇区は小ぶりの珠紋である。A～D の 4 種に細分され、A 種が出土。A 種は中心飾が大ぶりで、基部が二叉になる。唐草紋はすべて第 1・第 2 支葉を伴う。瓦当面には範の木目の痕跡が残る。また唐草紋や外区珠紋に範キズが見られる。曲線顎。 \*

平瓦部凸面には、瓦当寄りの幅約 3 cm に横方向の縄叩き目、それ以下に縦方向の縄叩き目が残る。縄叩きの後横方向にナデを加え、横方向の縄叩き目を一部ナデ消している。縄目は縦・横いずれも、3 cm あたり 11 本である (後述する平瓦の a 3 種)。横方向の縄叩き目は平瓦の成形にかかわるものではなく、平瓦凸面に瓦当形成のために置いた粘土を叩きしめるためのものであろう。平瓦部凹面は、瓦当から 4～6 cm の幅で横方向にヘラケズリを行ない、両側面も縦方向にヘラケズリを行う。 \*

胎土には 5 mm 大の砂粒を少量含む。焼成優。外面・断面とも灰色。1 点出土。

**6721 型式** 「小」字状の中心飾を有し、これを下から上へ巻き込む唐草で囲むのが特徴である。唐草紋は 5 回反転する。外区に小ぶりの珠紋を配する。H・J 種は脇区に珠紋を置くが、他は素紋とする。A, C～K の 10 種に細分され、A 種と C 種が出土した。A 種と C 種は中心飾の形状、珠紋数、主葉の巻き込みの強弱などの点で区別される。A 種は中心飾の両支葉がほぼ水平となるが、C 種は逆「ハ」字状を呈する。主葉の巻き込みは A 種のほうがやや大きい。下 \*



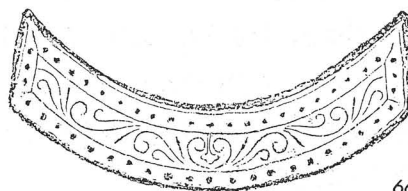
6641C



6663F



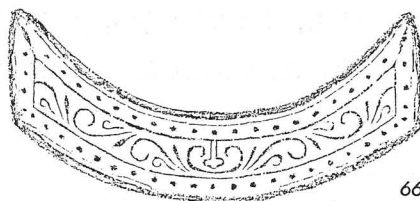
6663J



6664C



6664D



6664F



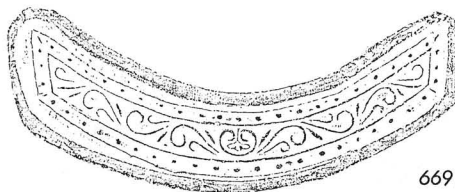
6667A



6671K



6675A



6691A



6721A



6721C



6732A

Fig. 33 軒平瓦 (瓦当纹様標式例)



外区の珠紋数はA種27, C種32である。両種とも曲線顎。

C種のうちに瓦当が完存し平瓦部の残りの良いものがある (fig.34)。平瓦部凸面は斜め方向 (左上がり, 右下がり: 瓦当を上, 狭端を下にした場合) の縄叩き目が残る。縄目は3cmあたり8本である (後述する平瓦のa2種)。瓦当寄りでは縦方向のナデによって, 縄叩き目を消す。平瓦部凹面の瓦当寄りは, 瓦当から7cmの幅で横方向にナデを行い, それ以外の部分には細かい \* 布目 (後述する平瓦のs種) が一面に残る。外縁上面から0.3cm下がった瓦当部凹面側にわずかに段が付き, 範端痕と考えられる。範端痕は凹面側だけに残る。

胎土にはA・C種いずれも1~2mm大の砂粒を多く含む。焼成良で外面灰黒色, 断面灰白色を呈するものと, 焼成可で外面・断面暗灰色を呈するものがある。A種7点, C種6点, 種別不明4点が出土。 \*

**6732型式** いわゆる東大寺式軒平瓦である。対葉花紋を中心飾に有するのが特徴である。唐草は3回反転し, 支葉の数が多し。外区・脇区とも細い珠紋を配す。A, C~Q, V, Wの18種に細分され, A種が出土した。A種はC種に似ており, 中心飾の対葉の先端が互いに接触せず分離している。瓦当全体がC種に比べやや大形で, 主葉の巻き込みが強く, 第1単位第2支葉が半環状を呈する。曲線顎。 \*

顎面と平瓦部凹面の瓦当近くを横方向にナデる。ナデの及ぶ範囲は瓦当面より7cmまでに限られ, それ以下には縦位の叩き目が明瞭に残る。縄叩き目は3cm当たり11本である (後述する平瓦のa3種)。平瓦部凹面は瓦当から約5cmの幅で横ナデを行い, 以下には細い布目 (後述する平瓦のa種) が残る。平瓦部凹面側側縁はヘラケズリによる幅広い面取りを施す。

胎土精良。焼成良で表面灰黒色, 断面灰白色を呈するものと, 胎土に5mmの砂粒を少量 \* 含む, 焼成可で表面暗灰色, 断面灰褐色を呈するものがある。前者は今回出土した6133型式C種と類似している。A種3点。種別不明4点が出土。

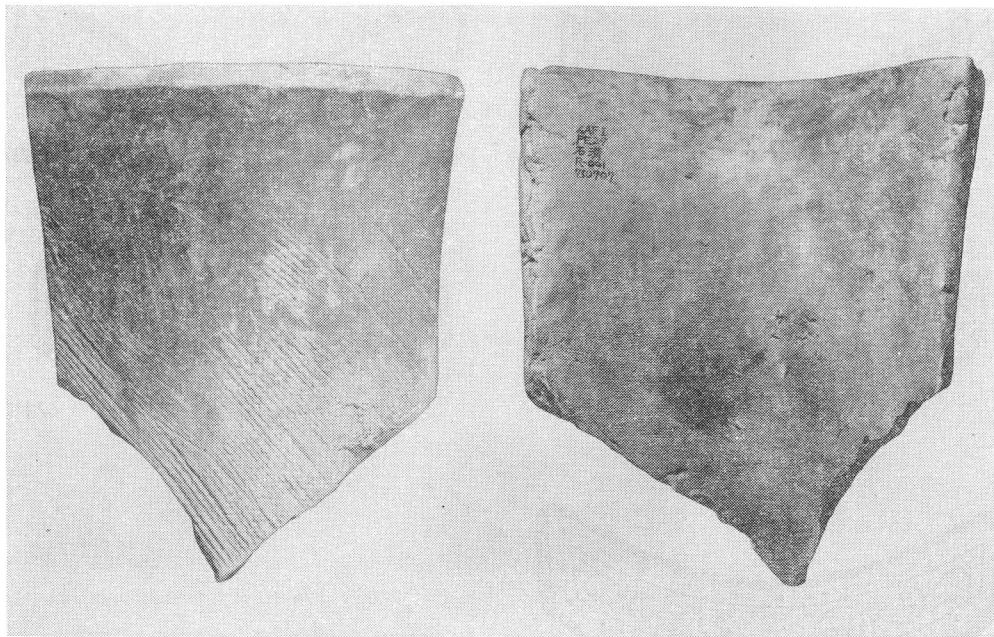


Fig. 34 6721型式C種 平瓦部凸面 (左) 同凹面 (右) 縮尺



## C 丸瓦・平瓦

出土した丸瓦・平瓦 273箱（整理箱）のうち、床土からの出土品を除いた 250箱分について、パーソナル・コンピューターを用いて解析した。今回は PC-9801 をホストコンピューターとし、整理室で PC-8201 に入力したデータを、PC-9801 に転送し保存した。データの検索・解析には PC-9801 を用いた。対象としたのは、丸瓦1682点、平瓦4148点、計5830点である。\*

従来の平城宮や藤原宮の調査報告では、おもに完形の丸瓦・平瓦を扱い、多くの成果をあげてきた。しかし今回の調査地では、完形品もしくは完形近くまで復原できる平瓦は皆無で、わずかに完形の丸瓦 1点があるのみである。また平城京内の遺跡であるため、平城宮で出土した丸瓦・平瓦のデータをそのまま敷衍することはできない。こうした状況は、限られた面積を調査した場合、よほど良好な遺存状態の一括資料が出土しないかぎり、普遍的に見られるであろう。藤原宮では、宮を画する内濠 SD1400 出土品を中心とし、計測可能な丸瓦63個体・平瓦102個体についての分析を行っている<sup>1)</sup>。平城宮では、丸瓦を第1次成形技法の違いで大きく3類に分け、それぞれを4種に細分している。平瓦についても、同じく第1次成形技法の違いで2類に大別し、それぞれを3種に細分している<sup>2)</sup>。破片となった丸瓦・平瓦についても、様々な方法による先学の取り組みがある。\*

今回は多量の破片をそれぞれの特徴によって分類し、検索することをおもな目的としてパーソナル・コンピューターを使用した。ただこのデータをもとに、数量的な様々な解析が可能である。それについては項をあらためて考えてみたい。

データの収集に当っては、特定の破片の持つ特徴を最大限に取り入れるため、分類の指標となる部位に限定することなく、できるかぎり多くの部分の特徴をデータとして収集することに務めた。最初に丸瓦・平瓦を区別するための記号を入力する。以下丸瓦・平瓦おのおのについて、整理箱番号、グリッド記号、層位・遺構、厚さ・重さ・外面の色、隅の有無、側縁・端縁の長さ調整、凸面の第2次成形・調整・糸切り痕の有無・重複叩きの有無、凹面の布目の粗密・糸切り痕・模骨痕・布綴じ合わせ痕・布端痕の有無・調整、備考の33項目に及ぶ情報を1個の破片から引き出している。焼成については、軒瓦で用いた3段階の相対的指標で表示し備考として入力した。以上の情報は破片1点につき84バイトを要する。\*

上記のようにして収集した各項目のデータは個々バラバラなものであり、そのままでは丸瓦・平瓦の分類には役立たない。そこで各項目の相関関係をコンピューターで検索する。頻度の高いもの及び大形の破片や、歌姫西瓦窯の出土丸瓦・平瓦の観察結果をもとにして、主体となる数型式を抽出することを目的とした。破片となった資料をあつかうため、最も普遍的な観察項目を指標とせざるを得ない。そこで第2次成形技法を中心とする結果となった。以下の記述では、第1次成形技法をうかがうことのできる資料についてまず述べ、そのあとで第2次成形技法や調整などについて述べることにする。\*

1) 『飛鳥・藤原宮調査報告Ⅱ』1978, pp. 41~51。

2) 『平城宮調査報告Ⅻ』1985, pp. 87, 88。

3) 西川廉次「出土した瓦片の計測による一試行」(『春日大社奈良朝築地遺構発掘調査報告』

1977) pp. 2~13。上原真人「平・丸瓦」(『恭仁宮跡発掘調査報告 瓦編』1984) pp. 46~77。京都大学考古学研究室『丹波周山窯址』1982, pp. 70~92。

## 1 丸 瓦

一般的に丸瓦は凸面の成形痕をナデ消しており、分類の指標とし得る観察項目が少ない。ここではまず完形品の法量を述べ、そのあと各部位の特徴と思われる事項について触れることとする。

- \* 完形品 (Fig.35) は QL36区、赤褐色土の出土で、全長 36.3 cm、胴部長 32.3 cm、玉縁長 4.0 cm、広端幅 14.1 cm、玉縁幅 9.8 cm。厚さは、玉縁 1.0 cm、広端 1.6 cm、胴部中央 1.8 cm を計る。

今回出土したものはすべて玉縁式丸瓦で、行基式丸瓦はない。第1次成形技法は、大きく粘土板巻き付け技法と粘土紐巻き上げ技法にわけられる。凹面に糸切りの痕跡を残す破片が14点あり、粘土板巻き付け技法の存在は知られるが、明らかに粘土紐巻き上げ技法で成形した例は見られなかった。

胴部凸面は、明らかなものではすべて、縦方向の縄叩き目を横方向にナデ消している。縄叩き目以外の叩き目を残すものはない。凸面調整は横方向のナデで、縦方向のナデや、ハケ目などの調整は見られなかった。ナデ調整には、叩き目を完全に消すものと、丸瓦狭端付近に叩き目を残すものがある。

胴部凹面は磨滅などで観察不能なものを除くと、すべてに布目が残る。データ収集にあたっては多量の資料を短期間に処理しなければならず、布目は、1 cm<sup>2</sup> あたり経8本×緯7本程度の粗い a 種と、経10本×緯8本程度の細かい b 種との2グループに分類した。a 種284点、b 種524点である。また布綴じ痕をとどめる破片が34点ある。凹面に縦方向の断面半円形の溝の残る破片が20点ある。溝内にも布目をとどめている。

成形にあたっては、胴部と玉縁部を一体で作り、丸瓦の狭端のみに粘土を貼付し成形している。藤原宮出土の丸瓦と比べると玉縁部が短い。玉縁端近くの凸面に横方向の突帯を1条もつものが1点のみ確認されている。また玉縁の両限を斜めは削るものがある。

粘土円筒は、内面に深さ 1 cm 前後の分割截線を入れた後分割する。側面は、分割破面を残すもの、側面全体を一様にケズリ分割破面をなくすもの、側面をケズった後に、さらに凹面側側縁にケズリを行い、面取りを施すものの3種がある。

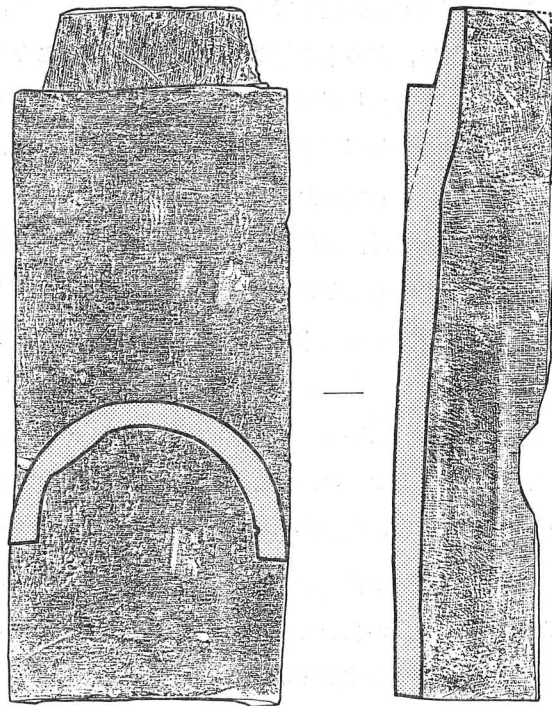


Fig. 35 丸瓦 (1 : 4)

1) 丸瓦・平瓦の記述にあたっては、佐原真「平瓦桶巻作り」(『考古学雑誌』第58巻2号, 1972)

『基準資料 I 瓦編1解説』1974, 『飛鳥・藤原宮調査報告 II』1978を参照した。

## 2 平 瓦

第1次成形技法には、桶巻作りと一枚作りがある。しかし今回は破片を対象としており、すべての資料についてその判別をつけることは困難である。さらに側縁のある破片であっても、側面や凹面側の側縁にケズリによる調整を施しているため、分割破面や布端痕が残らず、観察の不可能な場合がある。ここでは各成形技法の特徴を示す破片について記述するとどめる。\*

桶巻作りを示すものとしては、側面の分割破面、凹面の模骨痕、布の綴じ合わせ痕、粘土板の合わせ目などをあげることができる。今回出土した平瓦片のなかには側面に分割破面を残すものが10点、凹面に模骨痕を残すものが29点、布の綴じ合わせ痕をもつものが16点ある。ただし布の綴じ合わせ痕をもつもののうちの1点は、綴じ合わせの左右で、糸目の傾斜が食い違っており、桶巻き作りによるものと考えられるが、他の模骨痕と布の綴じ合わせ痕については、一枚作りでも発生する可能性があり、桶巻き作りの絶対的な指標とはなし得ない。また粘土板の合わせ目は、今回の出土品中には確認できなかった。\*

次に一枚作りについては、桶巻き作りに見られるような、確実な証拠に乏しいが、凹面の布端痕などをあげることができる。凹面に布端痕をとどめる破片は67点ある。厳密には側縁に平行する布端痕が一枚作りの証左と言え52点ある。この他一枚作りを示すものとしては、各1点ずつであるが、側面に糸切り痕跡を残すものと、布目の残るものをあげることができる。前者は、粘土板を切り取る前の粘土塊側面を糸切りによって平坦にしたものであろう。後者は左下隅の破片で、側面に長さ 5.5 cm にわたって凹面と連続する布目が見られる。ただし本例は分割界面が、ケズリ調整のあとも一部残ったものと考えられることもできる。\*

この他凹面の側縁近くで布目が乱れる破片があり、消極的ながら一枚作りの証拠とされる。<sup>1)</sup> 布目の乱れは、布の中心部より布端側により起こりやすい。桶巻き作りでは、布端部分は綴じ合わされ、布の乱れが起りにくいととも、必ずしも出来あがった平瓦の側縁近くには位置しない。布目の乱れが側縁近くに起こるということは、布が平瓦一枚分の大きさに近く、布端が側縁近くに位置していたためと考えることができる。\*

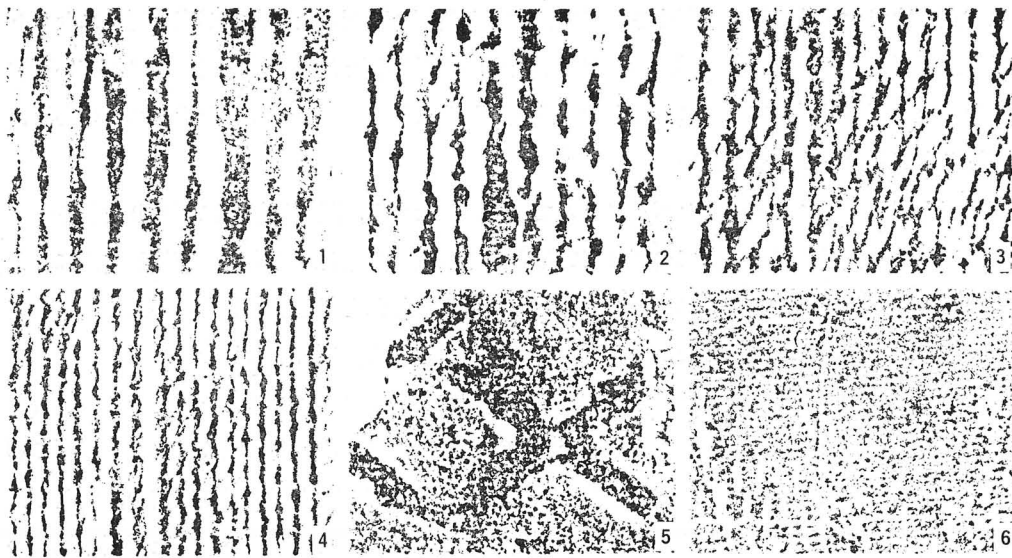
第2次成形には、縦位縄叩き目 a 種と、斜格子叩き目 b 種があり、b 種は2点のみである。\* a 種は単位長さあたりの縄目本数を基準に4種に細分される。3 cm 当りの縄目の本数が6～7本の a 1 種、8～10本の a 2 種、11～12本の a 3 種、14～15本の a 4 種である。\*

第2次成形終了後調整の工程にはいる。調整は凸面、凹面、側面、端面に、それぞれ異なった手法で行われている。凸面の調整は横方向のナデ調整が最も多く528点に認められる。次いで、指頭によるオサエが272点に認められる。ただしこのオサエは、側縁近くに位置するものが多く、瓦を成形台上から移動するときに付いたものかもしれない。\*

凹面は大部分が無調整のまま、布の圧痕(布目)が残るものが多い。布目は丸瓦同様経8本×緯7本程度の粗い a 種と、経10本×緯8本程度の細かい b 種との2グループに分類した。凹面にナデ調整を施すものが968点ある。部分的に縦位のナデ調整を加えるものと、凹面全面にナデ調整を行い、布目を完全に消し去るものがある。\*

側面は分割破面をそのまま残す a 種と、全面をケズリによって平滑にするものがある。a 種

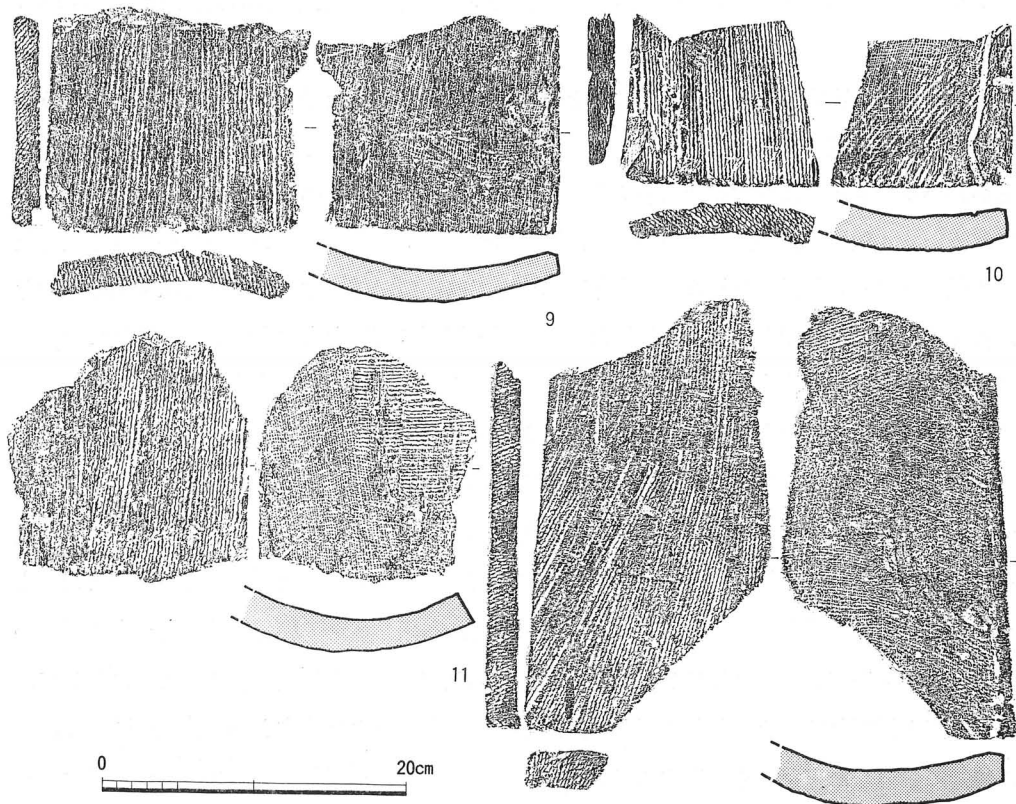
1) 五十川伸矢「古代瓦生産の復原」(『考古学メモワール』1980) p. 68 および註16。



a. 凸面の第2次成形技法 (1: a1種, 2: a2種, 3: a3種, 4: a4種, 5: b種, 6, 凸ナデ瓦 1:1)



b. 凹面の布目 (7: a種, 8: b種 1:1)



c. 凹面の縄目 (11), 側面・端面の縄目 (9.10.12) 1:5

Fig. 36 平瓦の第2次成形技法・調整手法他

は10点だけで大部分は後者に属する。後者は側面と凸面・凹面のなす角度が直角近くになる b 種と、側面と凸面のなす角度が鈍角、凹面のなす角度が鋭角となる c 種、両側縁に幅広い面取りを行い、側面を断面三角形に突出させる d 種にわかれる。側面全面にわたるケズリのあと、側縁に面取りを行うものも多い。

端面も側面同様に、全面をケズリによって平滑にしたあと、凹面側端縁に面取りを行う。 \*

凸面の叩き目が、圧せられてつぶれているものや、凹面の布目を完全にナデ消し平滑にしたものがあり、凸面以外の調整には、凹形調整台が使用されたと考えられるものがある。

焼成は、軒瓦の記述に用いた優・良・可の3段階の相対的指標で表わした。

次に特殊な技法を示すものに、側面や端面や凹面に残る縄目をあげることができる。これらはいずれも凸面に残された叩き目と同様な密度であるが、叩きの方向は様々である。端面の叩き目は平瓦の弯曲と無関係に、ほぼ平行に施されており、第1次成形を行う以前の、例えば、粘土板を切り取る以前の粘土塊を叩きしめた痕跡と考えることはできない。また側面や端面の叩きは、調整のためのケズリによって一部が消されているのがあり、凹面の叩き目は篋書きによって切られているものがある。このためいずれも第2次成形が終って、次の調整作業が始まるまでの間に施されたものと推定できる。側面・端面の叩き目は補足的な叩きしめと考えることができる。凹面の縄目は、凹形成形台上での叩きしめを想定できるほど丁寧なものではなく、方向もまちまちである。さらに端縁に平行に残される場合も多い。 \*

### 3 ま と め

これまで述べた各部位の成形・調整の各種技法を、第2次成形を中心にまとめたものがTab. 6である。 \*

本表から第2次成形の縄叩き目 a 3種と a 4種が今回出土した平瓦の主体をなすことがうかがえる。この2種の瓦を比較すると、a 3種に側面調整 c 種が多く、凸面のナデ調整が多いことがわかる。a 3種における凸面のナデ調整の多さは、以下に述べる凸ナデ瓦との関係で注目される。a 4種では側面調整 b 種が多く、凹面に縄目をもつものが多い点を指摘できる。また a 4種のみには篋書きが見られる。篋書き瓦については次項で詳述するが、歌姫西瓦窯の篋書き瓦も a 4種縄叩き目である点に注目したい。側面・端面に縄目をもつものは、a 3種で合計8 (0.7%) 点、a 4種で10点 (2.0%) となり、a 4種に多いといえることができる。 \*

以上は第2次成形をもとにしたが、叩きによる第2次成形を行ったあと、凸面全面にナデを行い叩き目を消してしまう瓦 (以下凸ナデ瓦と略する) が412点ある。凸ナデ瓦のなかには、縄叩き目の痕跡をわずかにとどめるものが103点あり、縄叩きによる第2次成形のあとナデ調整を行ったものと考えられる。凸ナデ瓦の特徴は、側面調整が c 種、凹面の布目が b 種となるものが多い。特に縄叩き目 a 4種をもつ瓦と比べると、布綴じ痕跡・模骨痕跡をもつものが多い反面、側面・端面や凹面に縄目が残るものが少ないなどの違いを指摘できる。これに対して、凸ナデ瓦と縄叩き目 a 3種をもつ瓦とは、凸面の縄叩き目をナデ消すという特徴を除けば、他の特徴に類似した点を多く見出すことができる。あるいは縄叩き目を a 3種もつ平瓦の一部に、凸面の縄叩き目を完全にナデ消すものがあり、それが凸ナデ瓦として抽出できたのかもしれない。 \*

今回資料とした丸瓦・平瓦は、包含層出土のものが大部分を占め、保存状態が悪いとともに、小破片になったものが多い。そのため調整などの観察が不可能なものも多く、なかには磨滅によって叩き目すら観察不能なものも少なくなかった。また数量的な処理によって、個体数を算出しようと試みたが、おもに上記の理由のため、各種の方法ごとに、数値に大きなバラツキが生じ、Tab.6 などの集計に生かすことができなかった。平城宮・京で出土する奈良時代の瓦のなかには、焼成の比較的軟質なものも多く、今回のように観察の困難な場合がある。今後、遺構出土の保存の良い一括遺物を扱かうことによって、より精緻な分類・考察が可能となるであろう。その場合、今回用いたような、携帯の可能なハンドヘルドコンピューターを用いた処理システムが、大きな威力を発揮するであろう。事前に完形遺物の観察によって、入力する情報を限定できれば、さらに合理的な資料収集と解析が期待できるであろう。

Tab.6 平瓦集計表

凸面第2次成形		a 1種	a 2種	a 3種	a 4種	b種	凸ナデ瓦
調整その他		41	156	1080	488	2	412
凸面	オサエ	8	14	104	68	0	0
	糸切り痕	1	1	2	3	0	1
凹面	布目 { a 種	6	23	215	186	1	52
	{ b 種	21	56	388	172	0	177
	ナデ調整	9	49	282	95	1	193
	布綴じ痕	0	1	9	0	0	5
	模骨痕	0	0	16	3	0	8
	縄目	0	2	5	22	0	3
	篋書き	0	0	0	「キ」14 「十」1 「大」1	0	0
糸切り痕	3	4	57	58	0	5	
側面	a 種	0	1	3	1	0	1
	b 種	5	30	159	119	1	47
	c 種	7	35	233	72	0	127
	d 種	1	4	26	10	0	12
	縄目	0	1	4	5	0	1
端面縄目		0	0	2	3	0	0
側端面両面縄目		0	0	2	2	0	1



## D 文 字 瓦

丸瓦・平瓦に篋で文字または記号を施した破片が19点出土している。内訳は、「キ」14点、「十」3点、「大」1点、「夫」1点である。これらと同じ種類の篋書きが6285型式A種・6667型式A種の焼成窯である歌姫西瓦窯から出土している。瓦の供給関係を知る上で重要と思われるので、<sup>1)</sup> 歌姫西瓦窯出土品と対比しながら述べる。 \*

「キ」 平瓦の凹面広端寄りに、広端を上、狭端を下にして記す。1点だけは狭端寄りに記す。字画は太く横画が先で縦画があとである。凸面には縦方向の縄叩き目 a 4 種 (C 丸瓦・平瓦の項参照。以下同) が残り、端面近くの凸面に手指によると思われるオサエが見られる。凹面には粗い a 種布目が良く残るが、側面・端面近くで布目の乱れるものが多い。側面の調整は b 種である。胎土には数 mm 大の砂粒を少量含む。外面・断面とも灰色で焼成優のもの、外面 \* 灰褐色か灰白色・断面灰白色で焼成良のもの、外面灰褐色・断面黒色で焼成可の3種がある。凹面に縄目の見られるものが3点ある。歌姫西瓦窯で出土した「キ」は1種類で、今回出土したものと同一字形である。側面・端面の調整が類似するとともに、凹面に縄目のある破片が1点ある。焼成にも優良可の3種がある。

「十」 第1画・第2画とも3cm前後と小形のA類2点と、第1画7cm、第2画6.3 \* cm以上と大形のB類に分けられる。A類は字画が細く、丸瓦の凹面に記される。内1点は玉縁の凹面である。凸面は縦方向の縄叩き目をナデ消す。凹面の布目はb種である。胎土精良。焼成良。外面・断面とも灰白色。B類は「キ」に似た太い字画で、平瓦凹面に記される。縦方向の凸面は縄叩き目 a 4 種が残る。凹面の布目は a 種である。凹凸両面に糸切り痕が残る。胎土精良。焼成優。外面・断面とも灰色。歌姫西瓦窯出土品にも同じような2種類があり、A類 \* 1点だけは丸瓦凹面に記され、あとは平瓦の凹面に記される。凸面には縦方向の a 4 種縄叩き目が残る。

「大」 字画は細く、平瓦凹面の隅に記される。凸面は縦方向の縄叩き目 a 4 種が残る。凹面の布目は b 種で、側縁近くで乱れた部分がある。側面の調整は b 種で、横方向 (側縁に平行する) の縄目が残る。端面には、凹面から連続する布目が残る。胎土は比較的精良。焼成良。 \* 灰白色。歌姫西瓦窯では「大」が最も多く、数種に細分される。なかの1種と今回出土したものの字形が類似する。側面の調整は b 種で、凹面の布目は b 種である。

「夫」 平瓦凸面に記される。字画は太く深い。凸面は縦方向の a 3 種縄叩き目が残る。凹面は全面がナデによって平滑に仕上げられる。胎土は砂粒を含む。焼成可。外面・断面とも灰褐色。歌姫西瓦窯でも「夫」は1点出土しているが、字画が細く小形である。また凸面が縦方 \* 向の a 4 種縄叩きで、凹面に記入されている等の違いがある。

歌姫西瓦窯では4号窯を中心として、「大」38点、「七」13点、「夫」12点、「十」10点、「キ」8点、「又」2点、「夫」1点の篋書き瓦が出土している。これらと今回出土した篋書き瓦を比べると、「夫」を除き字形がまったく同じであるとともに、字画の太さ・筆順・記入位置などの細部にわたる特徴が一致する。また篋書き瓦の側面や端面の調整、側面や凹面の \* 縄目の存在などの細部にわたる特徴も一致している。したがって今回出土した「夫」を除く3

1) 奈良県教育委員会『奈良山』1973, p.9。

種の篋書き瓦は、歌姫西瓦窯から供給されたものと推定することができる。<sup>1)</sup>

次に今回の出土品と歌姫西瓦窯での篋書きの種別数を比べると、今回は「キ」が圧倒的に多く、歌姫西瓦窯で主体をなす「大」が1点しか見られない点に顕著な特徴を見出すことができる。また「キ」は14点のうち10点がQ地区で出土するとともに、SB1474の柱穴やSE

\* 1547の埋土など、遺構から出土したものが多い。



Fig. 37 篋書き瓦(1:1)

1) ただし、篋書きが属人的なものと仮定すれば、工人の移動によって、まったく別の瓦窯か

ら、同一の特徴をもつ篋書き瓦が供給される可能性がある。

## E 道具瓦・埴

道具瓦では、面戸瓦11点、熨斗瓦1点、埴は小片を含めて50点が出土した。この他平瓦の一部を加工し、凹面側を幅広く面取りした破片が出土した (Fig. 38)。小片のため、全体の形状・用途は不明である。

### 1 面戸瓦

いずれも丸瓦を生乾きの段階で加工して面戸瓦とする。形態はいわゆる蟹面戸である。凸面の縦方向の縄叩き目を横方向にナゲ消す。凹面には細かいb種 (平瓦の凹面布目b種と同じ) の布目が良く残る。布綴じの痕跡を残すものがある。丸瓦を加工した部分の凹面側側縁には幅広い面取りが施され薄く仕上げられている。

全形のうかがえる資料が2点ある。大きさは長さ 18.8 cm, 幅 14.8 cm, と、長さ 21.7 cm, 幅 14.7 cm である。いずれも胎土精良。焼成優。外面灰色～暗灰色。断面灰色。出土遺構の明らかなものは、SE1547 から2点、SE1511 から1点、SD1525 から1点である。

### 2 熨斗瓦

1点出土。平瓦を生乾きの段階で半截して作った、いわゆる半熨斗である。凸面は全面にわたってナゲ調整を行っており、広端部近くにわずかに縦方向の叩き目が残る。凹面は不調整のため全面に糸切り痕と布目痕 (b種) が明瞭に残る。側面はヘラケズリによって仕上げ、凹面側の側縁には幅広い面取りを施す。広端部幅 11.0 cm, 長さ 14.8 cm 以上, 厚さ 2.1 cm。胎土精良。焼成優。外面・段面とも灰色。SD1545 から出土。

### 3 埴

すべて長方埴である。大きさに応じて4種にわけることができる (Tab. 7)。

A類は縦 27.4～28.2 cm, 横 19.3～19.7 cm, 厚さ 6.5～7.3 cm。表面 (型に粘土を詰めたとときの上面) と裏面 (型に粘土を詰めたとときの下面) はナゲ調整を行うが、側面は不調整。胎土に砂粒を多く含む。焼成可で、B類に比べて表面の磨滅したものが多い。

B類は縦 22.6～23.2 cm, 横 14.0～16.5 cm, 厚さ 6.6～7.4 cm。表面は粗くナゲる。裏面はほとんど無調整のままである。4側面のうち、1面～2面は無調整で凹凸のある面が残るが他はナゲ調整を施す。胎土精良で砂粒を含まない。焼成良。全体に灰白色を呈するが側面だけ灰白色を呈するものがある。

C類は厚さが 8.3 cm あるもので、胎土精良。長辺・短辺の大きさは不明。外面灰黒色。断面灰白色。焼成良。

D類は厚さが 5.0 cm あるもので、胎土に黒色の砂粒を含む。長辺・短辺の大きさは不明。外面断面ともに灰色。

いずれも型に粘土を詰め込んで成形している。割れ口やひび割れの観察によると、まず型全体の半分まで粘土を詰め込んだ後、あとの半分に粘土を詰め込む2段階の工程がうかがえる。粘土詰め込みのときの指や手掌の圧痕が明瞭に残るものもある (Fig. 39)。また破面に糸切り痕跡を残すものが1点あるが、板状粘土をあわせた成形痕跡は見出せない。

完形品と規格の推定できる大きな破片をあわせて、A類8点、B類8点、C類・D類は小破片でC類1点、D類2点である。この他の小破片をあわせて32点ある。

これら4種の埴は、宮内でみられる埴と規格の点で異なっている。宮内では建物の基壇外装などに多量の埴が用いられている。例えば、第一次大極殿地域の埴積擁壁 SX6600<sup>1)</sup>では長さ\* 30 cm 前後、幅 15~16 cm、厚さ 7~8 cm の長方埴が用いられる。また宮内西方の官衙地域では4種の埴が出土しているが、いずれも今回出土した埴とは大きさが異なっている<sup>2)</sup>。大ききで類似する資料では、左京四条二坊一坪の調査で検出した八角形横板組井戸 SE2600<sup>3)</sup>から出土した埴をあげることができる。ここの埴は3種に分類され、大形の1点は宮内の長方埴と同一規格であるが、最も量の多い中形埴は今回のA類と、小形埴は今回のB類と同じ規格と考えられる。平城京内では、平城宮と同じ規格の埴が用いられている場合もあるが(左京三条二坊十・十五坪など)、今回のように別規路の埴が使用される場合もある。例えば左京五条二坊十四坪ではA類の埴が掘立柱の礎盤として使用されている<sup>4)</sup>。

Tab.7 埴計測表

種別	出土遺構	大 き さ cm			色	重さ kg
		長 辺	短 辺	厚 さ		
A	SE1547	(16.5)	19.7	6.5	灰 色	2.47
	SE1547	(22.4)	(19.2)	6.3	灰 褐色	2.87
	SE1547	27.9	(9.3)	6.4	灰 色	2.21
	SE1547	27.6	(18.2)	7.0	灰 白色	4.79
	SB1552	27.9	(18.2)	6.7	灰 白色	4.68
	SB1552	28.2	(17.1)	6.6	灰 白色	4.67
	PP34 暗灰粘土	28.0	(16.9)	7.2	灰 褐色	4.93
	PO36 暗褐色土	27.4	19.3	7.3	灰 色	5.75
B	SE1547	(12.2)	16.0	(5.2)	灰 白色	1.02
	SE1547	22.6	14.5	7.4	灰 白色	4.15
	SE1547	(20.6)	(13.5)	7.1	灰 色	2.82
	SE1547	(12.3)	(14.6)	(5.6)	灰 色	0.87
	SB1552	22.3	(14.8)	6.6	灰 白色	3.30
	SG1504	(18.2)	16.5	6.9	灰 白色	2.56
	PR38 褐灰粘土	22.8	14.0	7.2	灰 色	3.74
	PP34 暗灰粘土	23.2	(13.7)	7.3	灰 白色	2.84
C	SB1571	(10.6)	(10.3)	8.3	灰 黒色	1.30
D	Q地区 灰褐色土	(7.3)	—	5.0	灰 色	0.49

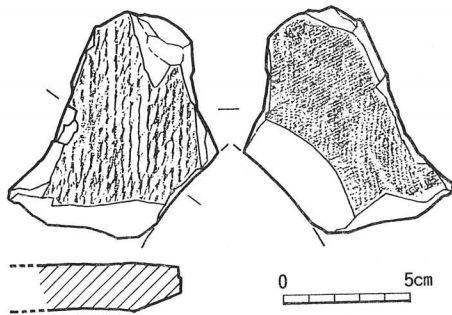


Fig. 38 加工した平瓦片 (1 : 3)

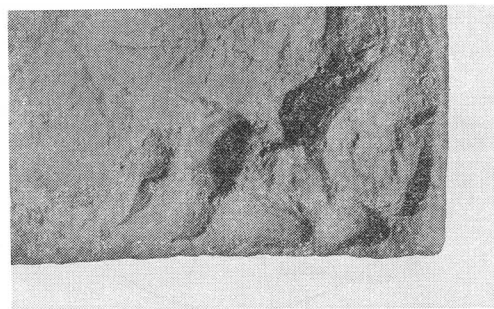


Fig. 39 埴に残る指の圧痕

1) 『平城宮調査報告 XI』1981, p.127。  
 2) 『平城宮調査報告 XII』1985, p.87。  
 3) 『平城京左京四条二坊一坪 発掘調査報告』

1984, p.23。  
 4) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和54年度』1980, p.18。

## F 小 結

### 1 軒瓦の組み合わせ

今回出土した軒瓦の構成は Fig. 40 のようである。出土頻度から見て、6285型式A種と6667型式A種、6282型式B b種と6721型式A・C種の組み合わせが推定される。前者の6285型式A種と6667型式A種は、歌姫西瓦窯でもこの組み合わせで出土している。6282型式B b種と6721型式A・C種の組み合わせは平城宮大膳職地域で出土の多いものである。大膳職地域では6133型式と6732型式の組み合わせも明らかにされており、今回出土点数は少ないが、6133型式C種と6732型式A種の組み合わせが推定できる。この他の軒瓦には他地域での調査結果から組み合わせの推定される例もあるが(6348型式A種—6675型式A種、6304型式C種—6664型式C種)、出土点数が少なく認定するに至らなかった。

### 2 軒瓦の時期

平城宮出土の軒瓦は5時期に区分し編年されている<sup>1)</sup>。今回は従来の編年をかえる遺物の出土はなかったので、平城宮軒瓦編年にしたがって記述する。また遺構から出土した軒瓦は、遺構の時期区分ごとに Tab. 5 にまとめた。

(1) 平城宮軒瓦編年第Ⅰ期(和銅元年～養老5年) 6274型式A種、6284型式C種、6279型式A種、6641型式C種、6664型式C種、6675型式A種がこの時期に属する。6272型式A種も紋様構成から見てⅠ期に位置付けられる。いずれも出土量は少ない。出土地点にも顕著な傾向は認めがたいが、調査区北端の二条条間路に接する地域で、6279型式A種2点、6641型式C種2点、6664型式C種1点が出土している。

(2) 平城宮軒瓦編年第Ⅱ期(養老5年～天平17年) 6348型式A a種、6285型式A種、6314型式B種、6664型式F種、6667型式A種、6671型式K種、6691型式A種がこの時期に属する。今回の調査では6285型式A種と6667型式A種の組み合わせが中心であり、この時期の瓦が最も多い。6285型式A種と6667型式A種の組み合わせは、紋様などから見てⅡ期のなかでも古く位置

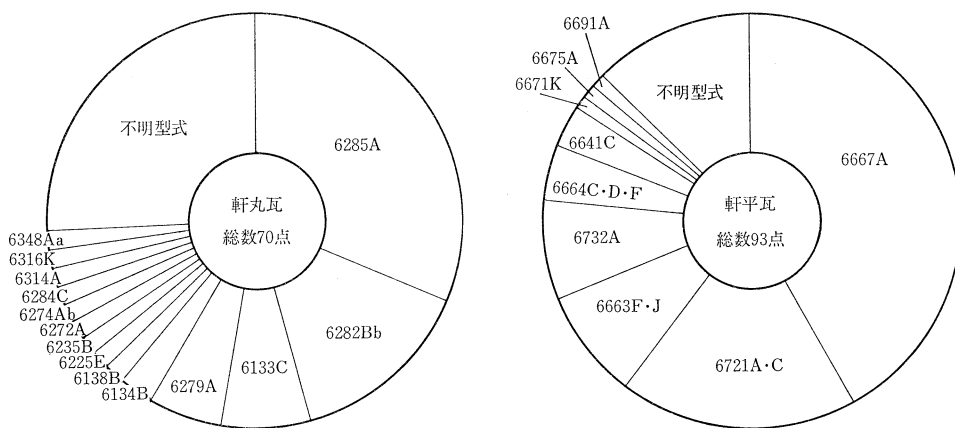


Fig. 40 軒瓦の出土比率

1) 『基準資料Ⅱ 瓦編2解説』1975。

付けられるものである。また6664型式F種は平城宮内の土壙 SK2101 で神亀5年(728)、天平元年(729)の木簡と共伴し<sup>1)</sup>、Ⅱ期の初期に位置付けられている。6348型式A a種はⅡ期に位置付けられているが、内区紋様が6279型式に酷似している。また平城京左京四条二坊一坪の調査では6348型式A a種と6675型式A種が組み合うことが明らかにされており<sup>2)</sup>、この組み合わせが

\* Ⅰ期に遡る可能性がある。6691型式A種は『平城宮報告Ⅹ』<sup>3)</sup>でⅡ期に変更された瓦である。ただし製作時期はⅡ期に遡るが、平城宮で使用されるのはⅢ期の時期になるものと考えられている。今回の調査でもⅢ期になって平城宮と同範の瓦の使用が顕著になる点から見て、6691型式A種の使用はⅢ期に下がる可能性がある。

Ⅱ期の瓦は6667型式A種がSD1525の上層から6点出土しているが、あとはまとまった出土

\* は見られない。6348型式A a種、6314型式B種、6671型式K種は調査区北端で出土している。

(3) 平城宮軒瓦編年Ⅲ期(天平17年～天平勝宝年間) 6282型式B b種、6133型式A種、6225型式E種、6235型式B種、6316型式K種、6663型式F・J種、6721型式A・C種、6732型式A種がこの時期に属する。Ⅲ期には6282型式B b種と6721型式A・C種の組み合わせが主体を占める。6282型式H a種・6721型式D種が平城宮内裏北外郭地域の土壙 SK820 から、天平

\* 19年(747)の銘のある木簡を伴って出土しており<sup>4)</sup>、天平末年を中心とした年代が与えられる。6282型式はA種をのぞくといずれも良く類似した紋様構成であり、H種と同様な年代が与えられる。平城宮大膳職地域では6282型式と6721型式、6133型式A～C種と6732型式A～D種の組み合わせが多く出土しており、今回の調査区でもそれと同範の瓦を用いて造営・整備が行なわれたと考えられる。6225型式A・C種と6663型式C種の組み合わせは、『平城宮報告Ⅹ』<sup>5)</sup>でⅢ期に位置付けられている。今回出土した6225型式E種や6663型式F・J種は紋様構成に大きな違いがあり、やや後出のものであろう。Ⅲ期の瓦は、SD1525、SE1547、SG1504、SD1466および、SB1540 付近の包含層(暗褐色土)からの出土が多い。

(4) 平城宮軒瓦編年Ⅳ期(天平宝字元年～神護景雲年間) 6138型式B種だけである。この瓦は法華寺阿弥陀浄土院所用の瓦とされている。SB1574の柱抜き穴から1点出土した。平城

\* 宮軒瓦編年Ⅴ期(宝亀年～延暦3年)の軒瓦は出土していない。

### 3 瓦窯との供給関係

今回出土した6285型式A種と6667型式A種の組み合わせは、従来から歌姫西瓦窯で生産され供給されたものと考えられてきた。この点について再検討する。

歌姫西瓦窯は、平城宮北方の奈良山丘陵にあり、平城ニュータウン建設にさきだって、奈良  
\* 国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部によって1972年7月31日から9月28日まで調査が行なわれた。その結果瓦窯6基が発見され、6285型式A種97点、6667型式A種33点をはじめ6313型式C種12点、6314型式E種7点、6402型式A種2点、6685型式B種1点<sup>6)</sup>が出土した。

**8285型式A種** 歌姫西瓦窯の製品(瓦窯出土軒瓦と略す)は、今回出土したもの(今回出土軒瓦と略す)に比べ、全体に範の磨耗が著しく進んでいる(Fig.42)。具体的には、今回出土軒瓦には

1) 『平城宮調査報告Ⅶ』1975, pp.71。

2) 『平城京左京四条二坊一坪 発掘調査報告』1984, p.23。

3) 『平城宮調査報告Ⅹ』1981, p.243。

4) 1)に同じ。

5) 『平城宮調査報告Ⅹ』1981, pp.242, 243。

6) 奈良県教育委員会『奈良山』1973, pp.20, 21。

見られない筈の木目痕が、瓦窯出土軒瓦には横方向の細い隆起線となって観察される。瓦窯出土軒瓦は筈の磨耗によって紋様が不鮮明になり、子葉基部が一体となったり、間弁の突出が著しく低いものなどが見られる。製作手法の点でも違いが見られる。今回出土軒瓦では、外区外縁の先端は、軽くナデを行うのみであるが、瓦窯出土軒瓦ではヘラケズリを加え平坦面をついている (Fig.41)。また丸瓦の接合に当っては、今回出土軒瓦では丸瓦凸面の先端部にキザミ \* を入れるが、瓦窯出土軒瓦にはこのキザミがない。瓦窯出土軒瓦には今回出土軒瓦に見られるような、須恵質の堅緻な焼成を示すものがなく、灰褐色の軟質の焼成で、胎土に大粒の砂粒を含む。

**6667型式A種** 今回出土軒瓦のうち観察可能なものはすべて平瓦部凸面に a 3 種縄叩き目をもつものに対し、瓦窯出土軒瓦は大部分が a 4 種の縄叩き目で、a 2 種縄叩き目も見られる。今回 \* 出土軒瓦は外縁が 3 段に立ち上がり高くなるのに対し、瓦窯出土軒瓦では低く幅広くなっている (Fig.43)。また瓦窯出土軒瓦には外縁部分に縄目をもつものが多いが、今回出土軒瓦には縄目をもつものがない。瓦窯出土軒瓦は平瓦部凹面側縁にヘラケズリによる幅広い面取りを施す。今回出土軒瓦は平瓦部凹面の瓦当寄りを縦方向にナデののに対し、瓦窯出土軒瓦は横方向に幅広くヘラケズリを行なう。また今回出土軒瓦は顎の長さが 7~7.5 cm に対して、瓦窯出土 \* 軒瓦は 5~6 cm ほどとみじかく、顎面の瓦当に向っての傾斜が、前者では急であるのに対し、後者では緩かである (Fig.44)。6285型式A種と同様、瓦窯出土軒瓦には今回出土軒瓦に見られるような須恵質の堅緻な焼成を示すものがほとんどなく、灰褐色~灰白色の軟質の焼成である。

歌姫西瓦窯の北方には、谷一つを隔てて音如ヶ谷瓦窯があり、4 基の平窯が検出されている。ここでも 6285型式A種 9 点、6667型式A種 3 点が出土している<sup>1)</sup>。歌姫西瓦窯出土品と類似 \* するものもあるが、歌姫西瓦窯出土品ほど筈キズが進行しておらず、6285型式A種では丸瓦凸面に接合のためのキザミを入れているなど、今回出土軒瓦に近いものもある。音如ヶ谷瓦窯自体は、平城宮軒瓦編年Ⅳ期の瓦を焼成しており、6285型式A種、6667型式A種は周辺の他の瓦窯からの粉れ込みであろう。

以上のように今回出土軒瓦は、歌姫西瓦窯で焼成された軒瓦と同筈であるが、筈の磨耗度や \* 製作手法などの細部に明らかな違いがある。むしろ音如ヶ谷瓦窯出土の粉れ込みと考えられるもののほうが、今回出土瓦により近い。今回出土軒瓦は歌姫西瓦窯から供給されたものではなく、周辺に存在する未知の瓦窯から供給されたものと推定できる。

観点をかえれば、今回出土の平瓦の中には筈書きや細部の製作手法の一致などによって、歌姫西瓦窯からの供給が推定できるものもある。ただし 61 ページの註 1 で述べたように、未知の \* 瓦窯で、歌姫西瓦窯とまったく同じ特徴と筈書きをもった平瓦が生産されていたとしたら、以上のような結論にはならない。しかし今のところ、今回出土軒瓦と歌姫西瓦窯とおなじ特徴をもつ平瓦とが、いっしょに焼成された可能性は少ないと考えている。なぜならば、もし今回出土軒瓦と歌姫西瓦窯と同じ特徴をもつ平瓦が、未知の瓦窯で同時に焼成されていたとしたら、軒平瓦にも縄叩き目 a 4 種をもつものが現われると考えねばならない。その事実が観察されな \* ない現状では、当初推定したように、軒瓦は未知の瓦窯から供給され、平瓦の一部は歌姫西瓦窯から供給されたと考えるのが妥当である。

1) 京都府教育委員会『奈良山Ⅲ』1979, p.24。

今回出土軒瓦

瓦窯出土軒瓦

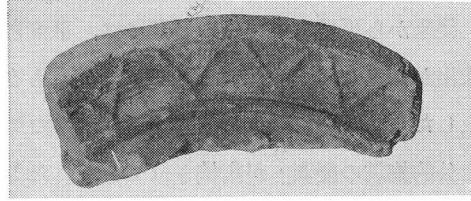
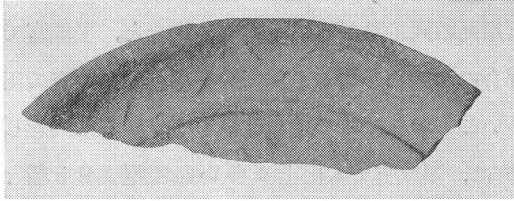


Fig. 41 6285型式A種 外区外縁の比較

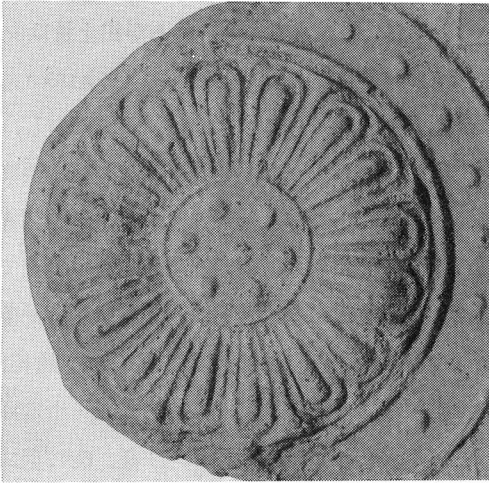
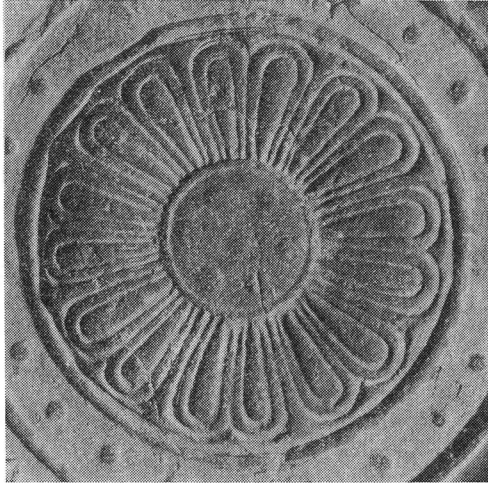


Fig. 42 6285型式A種 内区の比較

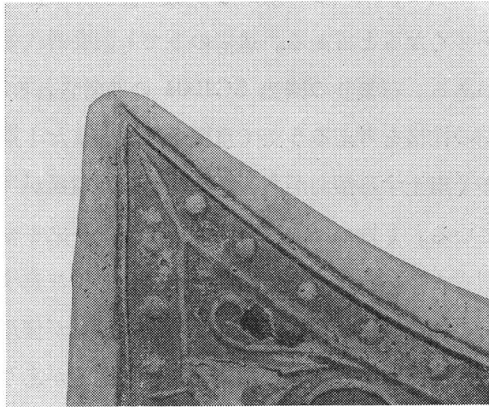


Fig. 43 6667型式A種 外縁の比較

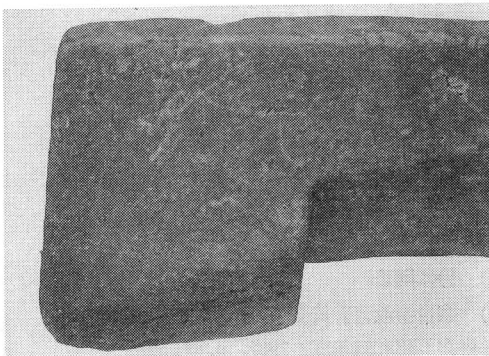
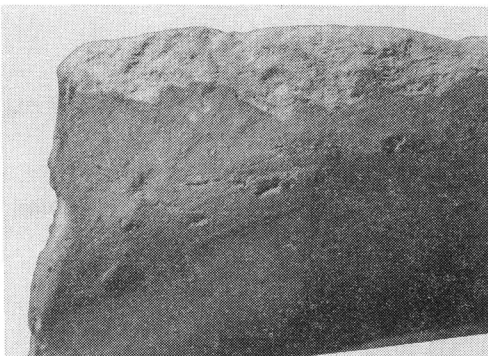


Fig. 44 6667型式A種 顚の比較



## 5 瓦から見た調査地の性格

従来から平城京内出土の軒瓦には、平城宮所用瓦の同範品が主体を占める場合と、平城宮で未出かあまり出土しない軒瓦が主体を占める場合の2様相が指摘されている<sup>1)</sup>。今回の調査で出土した瓦については、平城宮と同範のものが多くことから、この地の性格も「平城宮に関連した公的施設の要素」<sup>2)</sup>が指摘されてきた。たしかに、平城宮でも出土の多い6282型式B b種と6721型式A・C種、6133型式A種と6732型式A種の2種の組み合わせは、軒瓦出土量の30%弱を占め、Ⅲ期の瓦の中心を占める。しかしⅡ期の中心となる6285型式A種・6667型式A種の組み合わせは、平城宮でも見られるが出土量は少ない。平城宮跡第163次調査(1985年1月～3月)までの平城宮内出土軒瓦32326点(軒丸15503点、軒平16823点)のうち、6285型式A種は33点、6667型式A種は16点にすぎない。これに対し、今回は6285型式A種が22点、6667型式A種が39点出土している。一方、この組み合わせは法華寺周辺で集中して出土している。主なものは、1972年に行なわれた阿弥陀浄土院跡の調査<sup>3)</sup>で、6285型式A種が12点、6667型式A種19点、1977年に行なわれた法華寺経楼推定地の調査<sup>4)</sup>で6285型式A種が31点、6667型式A種が35点出土した。この他6285型式A種は、平城京左京一条三坊十五・十六坪、左京三条二坊十・十五坪、左京六条二坊三坪<sup>7)</sup>、左京四条二坊一坪<sup>8)</sup>、唐招提寺<sup>9)</sup>、東大寺<sup>10)</sup>などでも出土している。また6667型式A種は、平城京左京一条三坊十五・十六坪、左京三条二坊十・十五坪、東大寺<sup>13)</sup>などで出土している。この他6663型式F・J種、6272型式A種、6316型式K種、6348型式A a種などは、今回の出土量は少ないが、平城京内で点々と出土の知られるものである。

以上の結果からⅠ期からⅡ期の時期には、平城京的な瓦が多く、Ⅲ期になると平城宮的な瓦が多くなると言える。遺構の上でも奈良時代前半のB期と後半のC期以降との間に大きな違いがある。石張りの園池 SG1504 の造営される時期に平城宮的な瓦の使用が多くなる点は、C期の性格を考えるうえで重要である。またⅠ期の瓦は調査区北端の二条条間路に接する地域で多く出土する傾向がある。条坊関係の遺構が坪内の整備に先立って造営された可能性を示唆している。Ⅱ期の瓦の性格については、一応平城京的である点を指摘したが6285型式A種、6667型式A種が法華寺周辺に出土が多い点は注意する必要がある。法華寺経楼推定地の調査では下層の掘立柱建物の根固めとして上記の瓦が使用されている。6285型式A種、6667型式A種の性格は法華寺下層遺構の性格と密接な関連があり、今後に残された課題である。

1) 『平城京左京三条二坊』1985, p. 24。

2) 『平城京左京二条二坊六坪 発掘調査概報』1976, p. 14。

3) 『年報 1973』1974, pp. 27～29。

4) 『年報 1977』1978, pp. 32, 33。

5) 『平城宮報告Ⅵ』1974, p. 34。

6) 1)に同じ。

7) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和54年度』1982, p. 49。

8) 『平城京左京四条二坊一坪 発掘調査報告』

1984, p. 19。

9) 『奈良六大寺大観 第12巻 唐招提寺 一』1969, pp. 43, 44。

10) 岡本東三「東大寺式軒瓦について一造東大寺司を背景として一」(『古代研究』9, 1976), p. 23。

11) 5)に同じ。

12) 1)に同じ。

13) 10)に同じ。

### 3 土 器

発掘区の全域から土器が出土した。整理箱にして98杯分ある。そのうち半数は遺物包含層から出土したものである。遺構にともなったものとしては溝出土土器が最も多く、井戸がそれに次ぐ。この他土壇や柱穴からもごく少量の土器が出土している。

- \* 出土した土器は総体としてみると、土師器4割弱、須恵器6割と土師器・須恵器が大部分を占め、他にごく少量の黒色土器、施釉陶器、瓦器があり、墨書土器、刻線文土器、漆付着土器などの特殊な用途に用いたもの、陶硯、土馬、埴輪などの土製品がある。

土器は、井戸・溝出土の一部のものを除き概して保存状況は悪く、かつ小片となったものが多い。時期的には奈良時代前半から平安時代前半が中心になる。

- \* 以下、土器の記述は、池、溝、流路、井戸、土壇、建物、包含層の順に述べる。施釉陶器などの特殊な遺物については種類別にまとめた。

器種名、時期区分、調整手法などの記述については、既刊の『平城宮発掘調査報告』Ⅶ～Ⅹに原則的にしたが、それぞれの内容の詳細に関しては特に説明を要するもの以外は触れない。土器についてはこれまで食器類を中心にして、胎土・色調・手法・形態などによる群別がおこ

- \* なわれ、土師器をⅠ・Ⅱ群、須恵器をⅠ～Ⅳ群にわけている。今回の報告でもこれに従う<sup>1)</sup>。

土師器はⅠ群・Ⅱ群ともに出土しており、その他にⅠ・Ⅱ群以外のものもある。

須恵器については今回の発掘区ではⅠ群土器が多数を占めている。Ⅱ群土器がそれに次ぐ。

Ⅲ・Ⅳ群土器は全くみられず、またⅠ～Ⅳ群のいずれにも属さない土器が少量ある。

- \* 土器の年代観については、平城宮出土の土器を別表 (Tab.8) のように区分している。本遺跡からは従来の成果を検討できる資料は得ていないので、本報告ではこれに従う。実測図は原則として縮尺 1/4 とし、一部に 1/2 も採用する。実測図に付した番号は写真図版にも共通する。1～99が土師器、100番代が須恵器、200番代が施釉陶器、300番代が土製品とする。実測図・写真に掲げた土器の分量・群別等については巻末に出土土器一覧表 (別表4) として付載した。

#### A SG1504 出土の土器 (PL.22)

- \* 池 SG1504 から少量の土器が出土した。SG1504 の堆積土は灰黒色粘土で、池底石の間は灰色粘土である。池埋土は黄褐色斑入り灰褐色粘質土である。各層から少量の土器が出土した。平城宮土器Ⅴが主体を占める。

##### i 土 師 器

杯A・杯B・皿A・椀A・盤・甕がある。

- \* 杯A (2) は口縁部がゆるく内彎ぎみに開くもの。内面と口縁部外面をヨコナデし、底部は不調整のままとする。f手法による製品に近似するが、内面のヨコナデには左まわりのあがり<sup>2)</sup>がみられる。口縁端部外面は細い沈線状をなす。外面に粘土紐の継ぎ目を残す。

大 別 名 称	略 年 代
平城宮土器Ⅰ	710A. D.
平城宮土器Ⅱ	725
平城宮土器Ⅲ	750
平城宮土器Ⅳ	765
平城宮土器Ⅴ	780
平城宮土器Ⅵ	800
平城宮土器Ⅶ	825

Tab. 8 平城宮土器の大別

1) 胎土の観察は肉眼によった。

2) f手法については『平城宮報告Ⅳ』p.25

皿A(4)はほぼ完形のもの。口縁端部を内側に小さく丸く肥厚させる。口縁部内外面のヨコナデは右まわり。c<sub>0</sub>手法。暗文はない。皿A Iに属する。

椀A(3)法量から椀A IIに属する。口縁端部は内側に小さく肥厚する。内面のヨコナデは右あがり。外面はc<sub>3</sub>手法で、ヘラミガキは口縁部外面では4方向に分け、底部では一方向におこなう。このほか椀Aには底部外面に線刻をもつものがある(3・後述)。\*

盤(5)高台をそなえた盤。把手の有無は不明。a<sub>1</sub>手法。口縁部外面のヘラミガキは太く間隔は粗い。口縁部外面はヨコナデする。内面にはヨコナデ前のハケメをかすかにとどめる。

## ii 須恵器

杯A・杯B・杯B蓋・杯F・皿B・皿B蓋・鉢A・鉢D・壺A・甕・甌・平瓶・水瓶がある。\*

杯B 杯B II・杯B III・杯B IV(103)・杯B V(101)がある。底部はすべてヘラキリ<sup>1)</sup>。

杯B蓋 杯B III蓋(104)・杯B IV蓋(102)がある。

皿B(107)底部は丸底ぎみで下方へ大きく突出する。口縁部外面は灰がかぶる。

皿B蓋(106)頂部外面はヘラキリの後ロクロケズリで仕上げる。

水瓶(108)倒卵形の体部に、外方に直線的にひらく高い高台がつく。体部内面はロクロ目が著しい。浄瓶の可能性もある。\*

## B SD1465・1466 出土の土器 (PL.22)

池溢流溝SD1465・石敷排水溝SD1466から少量の土器が出土した。堆積土は暗灰色粘土と灰青色砂質土がある。時期的には平城宮土器Vに属するものが主体を占める。

## i 土師器

杯A・杯B・皿A・皿B蓋・椀A・椀C・高杯・甕がある。\*

杯A(6)は内面に暗文をもたず、c<sub>3</sub>手法。杯A Iに属する。杯Aには他に内面に2段の放射暗文をもつ小片がある。

皿Aは、暗文をもたない。c<sub>2</sub>手法。

高杯(7)は杯部の破片で2段の放射暗文とその間にループ暗文を配するもの。\*

甕(9)は体部外面ハケメ、内面は縦方向のヘラケズリ。体部下半内面にこげつきがあり、外面に煤が付着する。(8)は口縁部内面にハケメを残す。体部内面はナデ。

## ii 須恵器

杯B・杯B蓋・皿C・平瓶・甕A・壺Aがある。

杯B(115)は法量から杯B Iにあたる。\*

杯B蓋 杯B I蓋(109)・杯B III蓋(110~113)に属するものがある。(110・111)は頂部外面をロクロケズリする。(110)は内面を硯に転用している。(109)は頂部外面に一条の沈線がある。意識的なものか。(114)は端部が強く屈曲するもので、環状つまみに復原した。

(8)・(111)はSD1465出土。(5~7)・(109・110・112~115)はSD1466出土。

1) 本遺跡出土の須恵器杯・皿類の底部切り離しはヘラキリに限られる。以下原則として切り離し技法の記述を略す。

## C SD1545 出土の土器 (PL. 22)

築地南側溝 SD1545 出土の土器は土師器が圧倒的に多く、約 8 割を占め、これに若干の須恵器が伴い、土馬も出土している。土師器は大部分が細片となっており、保存も悪く崩壊寸前で、器種の帰属も明らかでないものが大半を占め、製作技法の観察に耐えうるものは少ない。

- \* 時期的には平城宮土器Ⅱ～Ⅴに属する。土器は SD1545 の東よりの部分に多い。とくに東より上層の一部にかけては土器溜りの様相を呈し、投棄された状況で多量の土器が集中して出土している。

SD1545 の東よりでは堆積層は 3 層に分けられる。中層（茶褐色粘質土）と下層（褐灰色粘土）には遺物が少なく、上層（炭混り暗灰褐色砂質土）からのものが大部分を占める。土馬（後述）

- \* の大半も上層から出土したものである。ここでは上層出土土器について述べる。

### i 土 師 器

杯 A・杯 B・杯 C・皿 A・皿 B・椀・鉢 A・杯 B 蓋・高杯・ミニチュアカマドがある。

杯 A には 1 段の放射暗文をもつものがあり、暗文を全くもたぬものもある。(10) は内面に 1 段の放射暗文が観察される。外面は保存悪く、手法は観察できない。

- \* 杯 B (14) 内面にラセン暗文・放射暗文があり、口縁部外面をヘラミガキする a<sub>1</sub> 手法。法量から杯 B Ⅱとする。

杯 C は放射暗文をもつものと暗文をもたぬものの両者がある。口縁端部は、内傾する面をもつものと、単に丸くおさめたものがある。(11) は後者の例で、b<sub>1</sub> 手法。内面に暗文はない。

- \* 皿 A には 1 段の放射暗文を確認できるものがある。

椀 C は口縁部の破片で、保存が悪く、内面のヨコナデがみられる他は手法の細部は観察できない。

鉢 A (12) 口縁部内外面はヨコナデ、外面はヘラケズリのあとヘラミガキする。内面に暗文はない。

- \* 高杯 (13) は脚柱部をヘラケズリによって断面 8 角に面とりする短かめの脚部。脚部内面にはシボリメを残し、下半は横方向にヘラケズリする。内面上端には棒状具の圧痕がある。

### ii 須 恵 器

杯 A・杯 B・杯 B 蓋・杯 C・杯 E・高杯・壺 A・壺 E・甕 A・甕 B・甕 D・鉢 A がある。他に獣脚 (120 後述) がある。

- \* 杯 A (117) 火ダスキ痕がある。

杯 B (116) は器高が大きく、杯 B I-1 に属するもの。ほぼ完形。底部外面ロクロケズリ。

杯 C には屈曲する口縁端部の形状が比較的土師器杯 A のそれに近いものと端部内面に沈線 1 条をもつのみで口縁部の屈曲をとまなわなない形態の両者がある。

壺 A (118) はほぼ完形の四耳壺で、最大径が中位より上にあるほぼ球形の体部に、短く直立

- \* する口縁部をつけ、外にふんばった高台がつく。肩部に環状の耳 4 個を縦につける。口縁部内外面と体部内面はロクロナデ、体部外面は肩部が縦位の、以下が斜位の平行叩き目を残し、体部下端はロクロケズリする。肩部外面と底部内面に自然釉がつく。

甕 (119) は、口径 42.0 cm の大形の甕である。他に甕には端部が丸く、内側に肥厚する「く」の字状口縁をもち、体部外面に横位の細かい平行叩き目をもつものがある。

## D SD1525 出土の土器 (PL.23・24)

流路 SD1525 から多量の土器が出土した。土師器・須恵器にごく少量の黒色土器が伴う。SD1525 の基本的な土層は、堆積土として上から第 1 層：暗灰色含砂粘土・茶褐色斑入り灰褐色粘質土、第 2 層：暗灰色粘土・黒灰色粘土、第 3 層：灰黒色粘土となり、堆積土の上に埋土 (茶褐色粘質土) がある。堆積土の土器は平城宮土器 I～II に属するものが主体を占め、一部平城宮土器 III を含む。埋土の土器は平城宮土器 III に属する。

### ① 堆積土出土の土器

#### i 土師器

杯 A・杯 B・杯 B 蓋・杯 C・皿 A・皿 B・皿 B 蓋・椀 A・椀 C・高杯・盤・鍋・甕 A・甕 B・甕 C・鉢 B がある。

杯 A (15) は 1 段の放射暗文と連弧暗文をもつ。a<sub>1</sub> 手法。

杯 X (17～19) はいずれも暗文をもたない。(17・18) は a<sub>0</sub> 手法。(19) は b<sub>0</sub> 手法。(17) の底部外面に木ノ葉圧痕を残す。なお (19) については 79 頁注 4) 参照。

皿 A (27) はラセン暗文と 1 段の放射暗文をもち、(25) はさらに連弧暗文を加える。両者とも放射暗文は正放射暗文であって、暗文の上端が口縁部上端に達せず、下半で終わっている。(26) は b<sub>3</sub> 手法。(27) は a<sub>0</sub> 手法である。

杯 B 蓋 (21) は杯 B 皿蓋で内面にラセン暗文をもつ。頂部外面は縁部を残して、ヘラケズリし、4 方向に分けて密なヘラミガキをほどこす。

椀 A (16) は椀 A I に属する。c<sub>3</sub> 手法。底部外面に「佐」の墨書がある。

椀 C (24) は口縁端部は内傾する凹面をなす。a<sub>0</sub> 手法。外面に粘土紐の継ぎ目を残す。

鉢 B (31) 内面及び口縁部外面をヨコナデし、底部外面ヘラケズリ、外面全体に粗いヘラミガキを加える。

高杯 (28) は杯部の破片で、内面にラセン暗文、1 段の放射暗文、連弧暗文がある。杯部外面はヘラケズリし、脚部上端にヘラケズリによる面取りを残す。(30) は長脚の脚部で、脚柱部はヘラケズリによって 13 角に面取りする。脚柱部内面には棒状具の圧痕を残し、裾部内面は横にヘラケズリする。(29) は脚柱部を粘土紐巻き上げでつくる。ヘラミガキしない。

甕 甕 A (34) は球形体部で外面にハケメ、口縁部内面にヨコナデ前の横または斜のハケメを残す。(35) はやや縦長の体部で口縁端部の巻きこみがない。体部内外面とも上半がハケメ、下半はヘラケズリする。(36) は体部外面にハケメ、内面はナデ、体部外面に黒斑がある。小形の甕 B (25) は一対の三角形の板状把手をもつ。甕 C (33) は口縁部が外反し、長胴で、ぶ厚い丸底をなす。体部内外面ともにハケメをつける。底部外面に煤が付着する。甕 A には、他に河内産と思われる小片がある。

鍋 B (32) は体部上半部に一対の三角形板状の把手をつける。体部外面全面に粗いハケメをつける。体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。

## ii 須 恵 器

杯A・杯B・杯B蓋・杯C・壺B・壺C・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・皿D・高杯・鉢D・甕A・甕Dなどがある。

杯A (128) は法量から杯AⅢにあたる。底部はヘラキリのまま。(129) は杯AⅤに属す。

- \* 杯Bは杯BⅡ (124・125), 杯BⅣ (123), 杯BⅤ (136・137), がある。

杯B蓋 杯BⅢ蓋 (121), 杯BⅣ蓋 (131) がある。(131) は完形。

杯X (127) 外面底部をロクロケズリし, 内外面を帯状にヘラミガキする。ヘラミガキは幅広く, 間隔は広い。

皿A (126) は底部外面ロクロケズリ。口縁部外面に帯状にヘラミガキを加える。

- \* 皿B (142) 皿BⅠである。いずれも底部外面ロクロケズリで仕上げる。

皿C (138) は底部外面をロクロケズリによって仕上げる。

皿D (141) は口縁部内外面をヘラミガキし, 平滑にする。底部外面をロクロケズリする。

壺B (144) は肩部に縦方向の板状把手をつける。<sup>1)</sup> 体部下半ロクロケズリ。

高杯 (143) は, 杯部下面を部分的にロクロケズリする。

- \* 甕 (146) 直口の口縁部をもつ甕で, 器内外両面が灰黒色, 内部は灰色の瓦質ともいうべき焼成の甘いもの。同様の特徴をもつものがもう1個体ある。

## iii 黒 色 土 器

杯と思われる黒色土器A類が1点ある。小片で図示できない。

### ② 埋土出土の土器

#### \* i 土 師 器

杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿C・高杯・椀・盤・鉢・鍋・甕がある。

皿C (22) はa<sub>0</sub>手法。

椀X (23) は口縁端部が丸く薄くおわるもの。底部をヘラケズリする。口縁部に煤が付着。

杯B蓋 (20) は上面が平坦なつまみをもつ。頂部外面は4方向のヘラミガキがある。法量か

- \* ら杯BⅡ蓋とする。ほぼ完形。

#### ii 須 恵 器

杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・高杯・甕・壺L・鉢A・平瓶がある。

杯Aは平底の杯AⅡと杯AⅣ, 丸底ぎみの杯AⅢがある。いずれも底部外面はヘラキリ不調整。

- \* 杯Bは, 杯BⅣ (135) がある。

杯B蓋は杯BⅡ蓋 (122)・杯BⅣ蓋 (133・134)・杯V蓋 (130・132) がある。

皿A (139) は口縁端部内面に一条の沈線をもち, 底部外面をロクロケズリする。

皿B (142) は底部外面をロクロケズリする。

壺L (140) 小型の壺で, 別作りの口頸部を<sup>2)</sup> 接合する。底部はヘラキリのまま。

1) 残存状況からみて把手は等間隔に割りつけた4個にはならず, 3個以下の可能性強い。写真では双耳壺に復原した。

2) 本例は, 包含層の遺物が混入したものである可能性が高く, 遺構の時期等を判断する資料としては除外する。

鉢A (147) は底部を欠く破片。体部最大径部分以下をロクロケズリする。

平瓶 (148) は口頸部を欠く。高台・提梁をもたない。上面に自然釉がかかる。

## E SD1560 出土の土器 (PL. 24)

河川 SD1560 からは少量の土器が出土した。奈良時代の土器は SD1525 と並存していた部分で出土し、時期的には平城宮土器Ⅰ～Ⅱの範囲におさまる。それより下の層(砂礫層)には弥生・古墳時代の土器を若干含む。なお、SD1560 は底まで掘り切った部分がなく、最下層については不明である。SD1560 中央部には後に SD1525 が穿たれるが、共に存続し、SD1525 と共に、奈良時代中頃に茶褐色斑入り灰褐色粘質土・茶褐色土によって埋められる。

### ① 奈良時代の土器

#### 土 師 器

杯A・杯B・皿A・高杯・甕A・甕C・鍋・盤がある。

細片のみで図示できるものがない。

#### 須 恵 器

杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・高杯・壺A・壺A蓋・壺B・壺E・甕Bがある。

小片のため図示できるものが少ない。

杯B蓋には内面を硯に転用したものがある。なお須恵器杯底部に墨書をもつ破片(152)がある。

壺A蓋は頂部中央部を欠く。破片で上面に灰をかぶる。

### ② 弥生・古墳時代の土器

弥生式土器には甕(畿内第Ⅴ様式)・高杯がある。小片で図示できない。

土師器小型丸底壺<sup>1)</sup>C (37) は下層の砂礫層から出土したもの。球形体部に直線的に開く口縁部をもつ土器である。完形品。体部最大径は中位より上にあり、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は細かいハケメをつけ、体部内面上半はナデ、下半をヘラケズリする。胎土に細砂粒、雲母を多量に含み、クサリ礫を少量混える。焼成は軟質。外面全体に煤が付着する。

他に土師器器台および須恵器高杯がある。

## F SD1451 出土の土器

道路 SF1559 の南側溝 SD1451 からは平城宮土器ⅠまたはⅡの土器、および平城宮土器Ⅲに属する土器が出土した。

土師器には杯A・甕、須恵器には杯A・盤A・甕Aがある。いずれも細片で図示できない。

## G SD1475 出土の土器

調査区東中央のSB1476の東にある南北溝 SD1475 からは平城宮土器Ⅱに属する須恵器杯BⅡ蓋が出土している。頂部外面ヘラキリのままで、内面はロクロナデ。Ⅰ群土器。

1) 器種名は『平城宮報告X』による。

## H SE1511・1547・1611 出土の土器 (PL.24)

### ① SE1511 出土の土器

井戸 SE1511 の底から土師器高杯 (42) 1点が出土した。脚部は外面を11角にヘラケズリで面とりし、裾部をヘラミガキする。脚部内面は上端にシボリ目を残し、以下は横にヘラケズリする。平城宮土器Ⅳに属する。

### ② SE1547 出土の土器

井戸 SE1547 から少量の土器が出土した。井戸埋土である灰黒粘土からは土師器杯A・杯C・椀A、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・皿B・壺K・鉢D・甕、黒色土器が出土した。杯A (38) は暗文をもたず、c<sub>1</sub> 手法。杯A (39) はラセン暗文と粗い1段放射暗文をつける。法量から杯AⅢとする。a<sub>0</sub> 手法。口縁端部5個所に煤が付着し、灯火器として用いられたことがわかる。実測図では煤付着部分を網で示した。(40) は杯CⅡに属する。a<sub>0</sub> 手法。内面に放射暗文がある。杯B (43) は細い断面三角形の高台がつく。口縁部外面をヘラケズリする。底部内面にヨコナデ前のハケメを残す。

井戸底バラス層直上からは土師器皿A・皿C・甕、須恵器杯B・杯B蓋・高杯・甕が出土した。小片で図示できない。

井戸底バラス層からは土師器杯A・皿A・皿C・椀A、須恵器杯BⅤ (156)・杯B蓋・壺A蓋・甕が出土した。土師器皿C (41) は a<sub>0</sub> 手法。内面にヨコナデ前のハケメを残す。この個体と直接接合する破片が井戸底バラス層直上から出土している。

### ③ SE1611 出土の土器

井戸 SE1611 からは少量の土器が出土した。須恵器杯BⅢ蓋 (157)・皿A・皿B・皿B蓋・鉢A・甕がある。

皿BⅠ (158) は、底部外面をロクロケズリする。

以上の土器には平城宮土器Ⅱを含む。

## I SK1516・1983・1993 出土の土器 (PL.24・25)

### \* ① SK1516 出土の土器

埋土 (褐灰色粘土) から須恵器盤A・杯B蓋各1点が出土した。盤A (159) は底部内面中央よりに同心円当て具痕を残し、口縁部外面下半はロクロナデのあと粗いヘラミガキを加える。底部外面は周縁から口縁部下端にかけてロクロケズリする。杯B蓋 (154) は頂部外面をロクロケズリする。完形品。他に環状つまみをもつ杯B蓋があり、頂部内面を硯に転用している。

### \* ② SK1983 出土の土器

SD1560 の旧河床に掘られた土壙 SK1983 出土の須恵器杯B蓋 (155) で、頂部外面に「侍従」の墨書がある。

③ SB1552 北側の小穴 SK1993 から須恵器壺Aが出土している。



## J SB1510・1540・1552・1570 出土の土器 (PL. 24)

### ① SB1510 出土の土器

掘立柱建物 SB1510 の柱抜き取り穴から土師器杯A (44) が出土した。内面にラセン暗文・放射暗文・連弧暗文を施す。平城宮土器Ⅱに属する。

### ② SB1540 出土の土器

SB1540 の根石下から土師器碗A (45) が出土している。c<sub>3</sub> 手法。法量から碗AⅡとする。

### ③ SB1552 出土の土器

掘立柱建物 SB1552 柱掘形から須恵器杯B(162)・杯B蓋・皿B, 柱抜き取り穴から陶硯(301・後述)が出土した。(163)は杯BⅠ蓋で、頂部外面はヘラキリのあと軽くロクロケズリを加える。(164)は皿BⅠで底部外面はロクロケズリ、爪状圧痕を残す。(162)には墨痕がある。

### ④ SB1570 出土の土器

掘立柱建物 SB1570 柱痕跡から須恵器杯BⅢ蓋(161)が出土した。

## K 包含層出土の土器 (PL. 24)

遺跡全体を覆う包含層からは多量の土器が出土した。土師器・須恵器を主体とし、ごく少量の施釉陶器・瓦器を混える。ここでは土師器・須恵器の一部を図示する。詳細は別表4参照。

## L 特殊土器・土製品類 (PL. 25)

### ① 施釉陶器

二彩陶器, 緑釉陶器, 灰釉陶器が少量出土した。二彩陶器は奈良時代, 他は平安時代に属する。

二彩陶器は2点出土した。(201)は小型火舎。胎土は白色で、器面内外両面に緑白の二彩を施釉している。軟陶。(202)は高台を残す底部の破片で小壺かとおもわれる。同じく緑白の二彩陶である。軟陶。いずれも包含層から出土した。実測図では緑釉部分を網で示した。

緑釉陶器 碗(203・205)がある。いずれも軟陶で、包含層から出土した。

灰釉陶器(204)はいわゆる蛇ノ目高台をもつ。碗あるいは瓶類の高台と考えられる。(206)はミニチュアの壺である。(204)は包含層出土, (206)は床土出土。

### ② 墨書土器・墨描土器

SD1525, SD1560, SK1983 および包含層から墨書土器6点・墨描土器3点が出土した。

墨書・墨描内容と器種・部位・出土遺構は次の通り。

1. 「侍従」(155) 須恵器蓋頂部外面。文字は肉太。SK1983 出土。
2. 「佐」(16) 土師器碗A底部外面。SD1525 堆積土出土。平城宮土器Ⅲに属す。
3. 「物 <sup>物か</sup> □」(168) 須恵器杯B底部外面。内面は朱墨硯として用いる。包含層出土。
4. 「宮」(152) 須恵器杯底部外面。SD1560 埋土出土。

1) 206は、肩に稜をもち、胎土が暗青灰色であることや釉の状況などから、いわゆる原始灰釉に属する余地を残している。

5. 「高」(124) 須恵器杯B底部外面。SD1525 堆積土出土。
6. 「<sup>〔注カ〕</sup>□」(135) 須恵器杯B底部外面。旁の可能性もある。下辺にも墨痕がある。SD1525 堆積土出土。
7. 記号(149) 須恵器(器種不明)外面。矢印様の記号。SD1525 埋土出土。
- \* 8. 記号(150) 須恵器杯B底部外面。円を2個接して描いたもの。SD1525 埋土出土。
9. 記号(151) 須恵器杯B底部外面。1個の円に接し、もう1個の円の一部がみえる。SD1525 埋土出土。

③ 刻線文土器(PL.22-3)

土師器碗A(3)の底部に、焼成後に針状のもので4線を交叉させて刻んだもの。SG1504 出土。

\* ④ 陶 硯

圈足円面硯が1点あり、他に、他の器種を硯に転用したのものがある。(301)は圈足円面硯で、陸部と裾広がりの圈台を一体に作り、圈足には篋で十字形の透し孔をあける。透し孔は8個所に復原できる。陸部の磨滅が著しく、墨痕をとどめる。SB1552 柱抜き取り穴出土。

転用硯は須恵器杯B蓋の内面を硯として利用したものが大半を占める(10点。包含層除く)。

- \* この他須恵器杯B身を利用したものが1点ある。転用硯の中には朱墨用が1点ある(168)。

⑤ 土 馬

土馬の大半はSD1545から出土し、他はSD1525・SB1476から出土した。まずSD1545の土馬は完形のもの1点もなく、すべて破片である。図示した2例(302・303)を除く各部位の内訳を破片数で示すと、頭2、首1、首-胴3、胴9、足51、尾7となる。個体識別が容易でないが、総個体数は30を越すと思われる。土馬の型式にはたてがみを表現するもの(303)と表現しないもの(302)の2種があり各2例確認できる。鞍の表現は胴部上面の隆起線2本で示すものが1例ある他は、単に上面をくぼめるだけのものである。尾の形態は、垂れ下がるものが5例、先端で上向きに屈曲するものが2例ある。SD1525埋土からは胴の小片1点、SB1476柱痕跡からは頭から首にかけての破片(たてがみのない型式)1点が出土した。

\* ⑥ 獣脚・注口

獣脚(120)、脚部を8角に面とりし、脚先端には縦に6条の切り込みをいれて5指を表わした。底面は平らで、須恵質の焼成。SD1545 出土。壺類あるいは火舎などにつくものであろう。注口(171)は円棒を芯にして成形し、外面は幅の狭いヘラケズリで調整する。開口部が細くなり、先を斜めに切り取っている。壺類の注口と思われる。須恵質の焼成。発掘区中央西

- \* よりの整地土(青灰色粘土)出土。

⑦ 漆附着土器

3点出土した。器種・漆附着部位・出土遺構は以下のとおり。

1. 土師器碗または鉢の内面。SD1525 埋土出土。
2. 土師器杯または皿の内面。包含層(QD30 暗褐色土)出土。
- \* 3. 須恵器皿E(160)内面。包含層出土。実測図では漆膜附着範囲を網で示す。

⑧ 埴 輪

埴輪はSD1525の堆積土第3層(灰褐色粘質土)、および埋土である茶褐色粘土から出土した円筒埴輪小片で、図示できない。

## M 小 結

土器からみた遺構の年代及び性格について述べ、むすびとする。年代順に見ていくと、先ず、弥生・古墳時代土器は SD1560 から出土しているが、この時期の遺構は明らかでない。<sup>1)</sup> 次いで奈良時代は、SG1504 の造成を境にその前後の 2 時期に分かれる。SG1504 造成前の土器が出土する遺構には SD1560 及び SD1525 の他 SD1545, SD1475, SE1611 などがある。このうち量的にややまとまって出土しているのは SD1525 である。SD1525 の土器は既に述べたように出土層位も単一ではなく、平城宮土器Ⅱを主体とするものの、一部平城宮土器Ⅰ及び平城宮土器Ⅲを含む。<sup>2)</sup> したがって厳密な意味での一括資料ではない。そうした年代の幅を考慮した上で、SD1525 の土器を総体としてみた時、器種構成の点で、SD1525 の土器は、供膳形態、貯蔵形態、煮沸形態のすべてをそろえている。SD1525 の土器には、これまで類例の乏しい器種がある。まず土師器杯 X (17・18) としたものについては器形の点で口縁端部の巻きこみがみられず、また暗文・ヘラミガキあるいはヘラケズリといった技法面でも、この時期に一般的な杯 A 類と全く異なる。次に、内傾する匙面をなす口縁端部の特徴を強調すれば、形態的には、杯 C 類に類似するようにもみえる。しかし、径高指数<sup>3)</sup>は 44 であって、同時期の一般的な杯 C 類のそれが 22 前後であるのに対して、深い形態であることが特徴であり、直ちに杯 C 類の系譜に属するものとはいえないことを示している。器種名については今後の資料の増加に待ちたい。<sup>4)</sup> ついで土師器甕類においては従来から知られる大和・河内産とみられるもののほかにそのいずれにも属さない甕 A (35)・甕 C (33) がある。これらは形態・手法上から伊賀・伊勢の土器との共通点が多い。<sup>5)</sup> 須恵器では杯 X (127)・皿 A (126) のようにヘラミガキを加えた丁寧なつくりのものがあり、Ⅱ群土器に属する。とくに (127) は従来類例の乏しい器形である。\*

築地雨落溝に比定されている SD1545 は、東よりの部分から土器が多く出土し、しかも堆積土の最上層に、集中的に投棄された状況で出土した。多くは年代的に平城宮土器ⅡからⅢにかけてのもので、伴出した多量の土馬は既に報告されている平城京 SD485<sup>7)</sup> と同一の型式に限られる。SD1545 の層位状況、そして SD1545 が東流する溝であることを考え合わせれば、SD1545 の流れる溝としての機能は、平城宮土器ⅡあるいはⅢの時期に失われていたと考えざるを得ない。但し、溝としての凹みはその後部分的に残っていたことは、SD1545 の他の部分から平城宮土器ⅣないしⅤに属するとみられる土器が出土していることから明らかである。\*

奈良時代中ごろには SD1525 が埋められ、SG1504 が造成される。この時期及びこの時期に後続する土器を出土する遺構には、ほかに SB1570 柱痕跡 (平城宮土器Ⅲ またはⅣ)、SE1511 (平城宮土器Ⅳ) などがある。この時期にはまとまった量出土する遺構はなく、SG1504 および SD1565, SD1466 が主たるものである。SG1504 の土器では、(1)・(4) のような平城宮土器Ⅴに属する土器が完形または完形に近い形で出土する傾向があり、同時にこれが池の廃絶時期を示すものでもある。<sup>8)</sup> SD1465, SD1466 からは、土師器甕など煮沸形態も出土していることをみれば、これらの土器は池自体の使用状況を直接的に反映するものではなく、SG1504 の周辺にあった建物などにおける食器の状況を示すものであろう。\*

最後に遺跡全体として、出土土器の種類に関して気付いた点を述べたい。いずれも遺物包含層または水田床土出土で、特定の遺構との結びつきは明らかでなく、またごく少数とはいえ二

彩陶器が含まれていることは遺跡の性格を考える上で重要であろう。文房具関係の遺物には陶硯が1点あるのみで、他はすべて須恵器の他の器種を利用した転用硯である。転用硯の中には朱墨に用いたものが1例ある。包含層にも転用硯がめだつ。定型硯が少なく硯の大部分が転用硯で占められている点も本遺跡の特徴の一つにあげられよう。土器の使用方法を直接示す資料

\* も若干ある。須恵器皿Eに漆の付着したものがあり、漆容器(パレット)としての使用を示す。このほか灯火器に用いられた土器がいくつかあるが、その器種は土師器杯AⅠ・杯AⅡ・碗AⅡ、須恵器杯Bなどまちまちで、口径が小さいか、器高の低い器種を用いるという傾向はあるものの特定の器種に限定されていない状況がうかがえる。

今回の調査では既に述べたように供膳形態や煮沸形態の土器の多様性や複数の産地の存在な

\* どいくつかの注目すべき知見が得られたが、土器のみからでは本調査区の性格を積極的に示すには至っていない。近年、平城京内の調査が進み、平城宮との比較にたつて平城京の土器の特色を抽出する試み<sup>1)</sup>がなされつつあり、本調査では貴重な資料を加えたといえよう。

<78頁の注>

- 1) 近接地で古墳時代土器の出土した遺構には6AFI-H区のSD881がある。『平城京左京三条二坊』奈文研, 1975。
- 2) 各段階に属する土器として、平城宮土器Ⅰ-128, 同Ⅱ-15・26, 同Ⅲ-16などを典型例にあげることができる。
- 3) 径高指数=器高/口径×100
- 4) 17・18の類例は同じ坊の七坪に属するSD1525の北延長部からも出土している。『昭和52年度平城概報』p.24。なお19に関しては、器形を異にするが、手法、胎土・焼成・色調を共通にする鉢が6AAC-V区のSD3035下層(『奈文研年報1965』p.36, 『平城宮木簡二』p.18)から出土している。
- 5) 例えば、三重県地蔵僧遺跡(『地蔵僧遺跡発掘調査報告』亀山市教委, 1978, PL.28-426・435)など。なお、33の類例が法隆寺SK3561(『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』法隆寺, 1985, PL.90-233, PL.91-241)にある。
- 6) ヘラミガキを加える須恵器はⅡ群土器に例が多い。
- 7) 『平城宮報告Ⅵ』p.53, PL.64
- 8) 井戸の場合はSE1547の埋土から43のように9世紀中頃を前後する時期の土器が出土しており井戸の最終的な埋没年代を示す。これによって本遺跡の主要部分の存続年代の下限の一端を平安時代前期におくことができよう。

<79頁の注>

- 1) 『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』奈文研, 1983, p.25-26。なお、本遺跡では平城宮土器Ⅴの段階の土師器にf手法が存在する(PL.22-2)。平城宮内のこの段階の資料、例えばSK870・2113(『平城宮報告Ⅶ』p.90-95), SE6166(『平城宮報告Ⅷ』p.101)にはf手法はみられず、SE311-Bすなわち平城宮土器Ⅶに出現している。一方、平城京城では6AFI-H区SE877(『平城京左京三条二坊』p.25, fig.15-3)のように平城宮土器Ⅴ段階にこの手法による製品がみられる。この点も宮の土器と対比した場合、京の土器の特色の一つにあげられよう。

## 4 木製品・繊維製品

### A 木製品 (PL. 26~28)

木製品は約460点出土した。このうち SX1464・SD1466・SE1511・SD1560 出土の5点以外はSD1525からの出土である。種類は祭祀具・紡織具・服飾具・遊戯具・農具・工具・食器具・容器・雑具・部材などがあるが、大多数が用途不明の板状品・棒状品である。\*

祭祀具 齋串・人形・馬形がある。

a 齋串 (1・2) 細長い薄板の上端を圭頭状に、下端を剣先状に作り、左右両側辺から切り込みを入れる串状品。1は上端近くの側辺の左右2個所に切り込みを入れる。現存長さ 26.7 cm, 幅 2.0 cm, 厚さ 0.2 cm, ヒノキ柁目材。SD1466 出土。2は側辺を割り裂くように上端木口から切り込みを入れるが、欠損のため切り込み回数が1回か複数回かは不明である。長さ 15.7 cm, 現存幅 1.4 cm, 厚さ 0.2 cm, ヒノキ柁目材。\*

b 人形 短冊状の板から作る扁平な正面人形(6)と、棒状の材で立体的に表現する立体人形(4・5)がある。6は頭部を圭頭状に削り、頸部をV字形に切り欠くが、切り欠きは二辺の長さが等しく撫で肩となる。腕は下方からの切り込みであらわし、下端の木口から切り込みを入れて折りとり足を表現する。顔には墨で目鼻口を表現する。現存長さ 14.8 cm, 幅 2.0 cm, 厚さ 0.25 cm, ヒノキ柁目材。5は断面蒲鉾形の割材に切り欠きをめぐらし頸と腰をあらわす。右肩から左脇腹にかけて平行する2本の刻線を入れ上衣の前合わせを表現し、左肩から右脇腹にかけて5~7本の刻線を入れる。顔の表現は腐蝕のため不明。現存高さ 15.7 cm, 径 1.9 × 1.4 cm, ヒノキ。4は心持丸木の棒を加工した人形で頸部以下を欠失する。細かい削りで尖り気味の頭部を作る。顔の表現はない。現存高さ 4.2 cm, 径 2.6 × 1.9 cm, 広葉樹(散孔材)。\*

c 馬形(3) 薄板の上辺を切り欠いて背を、下辺を半円形に切り込んで頸を表現する。頭部を山形に作り出し額と鼻筋を区別する。胴部下半を欠失し鞍の有無は不明。現存長さ 12.6 cm, 幅 3.4 cm, 厚さ 0.5 cm, ヒノキ板目材。SE1511 出土。

紡織具 糸巻きの横木が2点ある(8・9)。ともに梓木4本からなる糸巻の横木。板の中央を幅広く残し、両端を両側から削り細め、梓木に差し込む枝部とする。中央部には相欠き仕口を作り、そのかみ合わせ部分の中央に軸棒を通す円孔を穿つ。円孔は8が鼠歯錐、9が刃物の先であける。8: 現存長さ 9.7 cm, 幅 1.85 cm, 厚さ 0.4 cm, ヒノキ柁目材。9: 現存長さ 8.8 cm, 幅 1.8 cm, 厚さ 0.7 cm, ヒノキ板目材。\*

服飾具 櫛と留針がある。

a 櫛(10) いわゆる挽歯の横櫛で、板の側縁から細かい歯を挽きだし、表面を平滑に研ぎあげる。全形は長方形で、肩部は欠失しているが、丸味を帯びた形に復原できる。歯の挽きだし位置を決める切り通し線は、背の上縁に平行して曲線を描く。歯は両面から交互に鋸で挽き、先端を両面から刻って尖らす。歯の数は3 cm あたり20本で粗い。背の断面形は圭頭状を呈す。現存幅 5.0 cm, 高さ 4.8 cm, 厚さ 1.15 cm, モッコク。\*

b 留針(16) 細長い棒状の具。身が扁平で一端が尖る。身の断面形は、上半部が長方形、\*

下半部が凸レンズ形である。現存長さ 17.5 cm, 幅 1.35 cm, 厚さ 0.6 cm, ヒノキ柾目材。

**遊 戯 具** (11) 断片であるが、等脚台形の下底に三角形の切り欠きを入れた琴柱に復原できる。上底と両斜辺がやや内湾する。下底の両端を結ぶ線が内湾した弧を描くのは、槽の上面が反りをもっていたことと対応するのであろうか。現存幅 4.2 cm, 高さ 3.65 cm, 厚さ

\* 1.0 cm, ヒノキ板目材。

**農 具** 木錘と横槌がある。

a 木錘 材の中央を細くして紐を結ぶもの(7)と、材の一個所に孔をあけて紐を通すものがある。7は割材を断面多角形に粗く削り、材の中央に四方から切欠きをいれる。蓆編みなどに用いる「槌の子」であろう。長さ 8.4 cm, 径 1.7~3.5 cm, ヒノキ。他の1点は、丸太

\* 材の両端を切断し、その約3分の1を割りとり、材のほぼ中程の丸木面から割面にかけて不整形の孔を貫通させたもの。現存長さ 19.1 cm, 幅 7.1 cm, 厚さ 3.8 cm, アカガン亜属。

b 横槌 (29) 円柱形の身と棒状の柄とからなる。割材を用い、身から次第に削り細めて柄を作り、柄尻を太く削り残す。身径 9.1 cm, 柄径 2.5 cm, アカガン亜属。

**工 具** 篋・木針・刀子鞘・楔がある。

\* a 篋 (12・28) 12は薄板の下半を両側から削り細め、先縁に片刃状の刃をつける。刃をつけた面は先縁近くのみ削りを施し、大部分は割面を残す。裏面は全体に削る。長 14.6 cm, 幅 2.7 cm, 厚さ 0.3 cm, スギ板目材。SX1464 出土。28は細長い割材の一端を両面から削り薄め、先縁を半円形に作る。他端は片面から斜めに削り落す。身の断面形は下半部が長方形、上半部が等脚台形。長さ 17.2 cm, 幅 1.7 cm, 厚さ 0.8 cm, ヒノキ板目材。

\* b 木針 (17) 細長い薄板の一端を圭頭状に削り、それから 3 cm 以下を断面扁杏仁形に丁寧に削り細めて端を尖らせたもの。圭頭部近くに針耳を穿つ。針耳は両面から刃物によって穿孔している。長さ 17.05 cm, 幅 1.3 cm, 厚さ 0.4 cm, ヒノキ柾目材。

c 刀子柄 (24) 割材を削ってつくる。柄元部分を欠損するが、茎孔がわずかに残る。柄頭寄りの3分の1程を木表側から斜めにそぎ落とし、対応する木裏側と一側面とを浅く切り欠いて、柄頭を突起状にする。柄の断面は扁六角形で、茎孔の断面は長方形。現存長 11.4 cm, 径 1.25×1.0 cm, 茎孔径 0.8×0.3 cm, ヒノキ柾目材。23は柄元部分を欠損し茎孔は残っていないが24に似る。割材を偏七角形に削り、柄頭近くを周囲から切欠いて浅い溝をめぐる。現存長さ 13.6 cm, 径 2.3×1.5 cm, ヒノキ柾目材。

d 刀子鞘 (18) 二枚合わせの鞘に想定できる。外面は縦方向に丁寧に削る。内面は粗い削りぬきにとどまり、細かい調整を行わない。二枚合わせた復原断面形は、脊側が厚く刃側が薄い扁五角形となる。現存長さ 10.7 cm, 幅 2.5 cm, 厚さ 0.7 cm, ヒノキ板目材。

e 楔 (25~27) 25は割材を丸棒状に加工し、下半を両側から削って刃とする。刃は先端を欠損する。頭頂部は平らに削る。現存長さ 8.7 cm, 径 1.1×1.0 cm, スギ。26は撥形の板の片面を削り薄めて刃とする。先縁は弧状を呈する。両側面は下半のみ削り、上半は割面を残す。頭頂部は刃物で切り目を入れ折り取ったまま加工していない。現存長さ 7.2 cm, 幅 3.8 cm, 厚さ 1.2 cm, トチノキ板目材。27は割面をとどめる長方形の板の両面下半を削り薄めて刃とする。両側面は削る。先端・頭頂部はともに切り目を入れ折り取ったままである。現存長さ 10.1 cm, 幅 3.7 cm, 厚さ 0.8 cm, ヒノキ板目材。

**食 事 具** (13~15) 匙形木器が3点ある。ともに細長い板の一端を身とし、頸部から次第に幅を狭めて柄を作る。13・14は身幅が広く、身の側縁から頸部への折曲点が稜角をなし撥形の頸部をつくる。13は柄が太く短かく、身の両面とも甲高で、先縁は弧状を呈す。14は柄が細く、身の両面とも平坦で裏表の区別がない。15は身幅が狭く、身と柄の境は不明瞭。先縁は半円形を呈し、両面から削り薄める。13：現存長さ 12.8 cm, 幅 3.2 cm, 厚さ 0.6 cm, ヒノキ板目材。14：現存長さ 8.5 cm, 幅 2.3 cm, 厚さ 0.2 cm, ヒノキ板目材。15：現存長さ 9.7 cm, 幅 1.4 cm, 厚さ 0.4 cm, ヒノキ板目材。

**容 器** 漆器蓋・漆器鉢・円形曲物・蓋板などがある。

a 漆器蓋 (32) 平坦な頂部と屈曲する縁部とからなる蓋。全体に厚手のつくりで、縁端部内面に返りをつけ、頂部中央に扁平な宝珠つまみがつく。木心の上に布着せし全体に黒漆をかける。木地は腐蝕するが、漆膜がよく保存され、痕跡からみて横木取りの挽物であることが判る。径 16.5 cm, 復原高 2.5 cm, 樹種不明。

b 漆器鉢 体部が扁球状を呈し、器壁は厚さ 0.7 cm。壺形になる可能性もある。木心の上に布着せはしていない。木地はほとんど腐蝕するが、漆膜の断片が多数あり、痕跡からみて縦木取りの挽物であることが判る。法量復原不能。広葉樹で樹種不明。

c 円形曲物 底板5点、蓋板1点、側板1点がある。底板(36~40)はいずれも周縁を鋭利な刃物で垂直に断ち落とし、側面に側板固定用の木釘穴がある。40は内面のみ平滑に削り外面には割面を残す。36：直径 9.0 cm, 厚さ 0.55 cm, ヒノキ板目材。37：復原径 15.2 cm, 厚さ 0.55~0.6 cm, ヒノキ板目材。38：直径 14.3 cm, 厚さ 0.3~0.6 cm, ヒノキ板目材。39：直径 16.0 cm, 厚さ 0.5~0.75 cm, ヒノキ板目材。40：直径 16.8 cm, 厚さ 0.5 cm, ヒノキ板目材。蓋板(35)は周縁・両面とも削って仕上げる。周縁面は内傾する。下面に側板位置を決めるためのコンパスによる針書きがある。針描きは縁部の内側 0.5 cm の位置にある。針描きの円弧をはさんで2孔一対のとじ穴があり、側板をとじた樺皮が残存する。直径 18.3 cm, 厚さ 0.5 cm, ヒノキ板目材。側板は小片で外面は平滑に削り、内面は腐蝕するが、垂直方向と斜方向の刻み目(けびき)がある。側板幅やとじ部分の仕口は不明。ヒノキ板目材。

d 蓋板(33・34) 円板状で裏表とも平滑に削り、周縁を鋭利な刃物で内傾気味に断ち落とす。33：復原直径 18.5 cm, 厚さ 0.5 cm, ヒノキ板目材。34：復原直径 19.5 cm, 厚さ 0.5 cm, スギ板目材。

**雑 具** 自在鉤(30) 二段になった小枝の一方を短くし、先端を尖らせ鉤形とする。他は樹皮を取り除く程度に削る。鉤部の上面が摩滅する。長さ 26.8 cm, 径 1.7 cm。マツ属。

**部 材** 把手(31)がある。厚みのある板材の上部中央を半円形に削りぬき、その上縁を横位の棒状に削り出して鋤の把手のようにかたどる。下半分を両側から切り欠き出柄状とし、中央に長方形の柄孔を貫通させる。別材に柄を埋め、栓で固定したのであろう。現存長さ 17.0 cm, 幅 11.1 cm, 厚さ 2.8 cm, アカガシ亜属板目材。

**用途不明品** 薄板の側縁にV字形の切り欠きを数個所いれるものが3点(20~22)、厚い小さな方形板の上下面と側面との境を面取りしたものが1点(19)ある。

## B 織 維 製 品 (PL. 29)

SB1472 の北東隅の柱抜き取り痕跡から、黒漆を塗った平織の麻布が出土した。遺存するのは方約 35 cm であるが、糸は 1 cm あたり 7 本と 9 本を数える。

## C 漆膜の断層観察 (PL. 29)

- \* 漆器蓋および漆器鉢の漆膜について、断面資料の顕微鏡観察を行った。資料は漆膜の微少な細片を採取し、アルコールで脱水し、キシレンで置換した後、10%のアクリル樹脂で保存処理を行った上で不飽和ポリエステル樹脂に封入したものである。試料の作成・写真撮影は、沢田正昭・肥塚隆保による。顕微鏡写真によると、両者ともに木地の上に厚く下地漆を施してから、茶色系統の漆を薄く 2～4 回に分けて塗り重ねている。下地漆の表面はかなりの凹凸があるが、それより上の各層の境はきれいな整合性を示し、現在の技法でいう研ぎを行っている可能性がある。漆層の厚さは、漆器蓋では上から順に 40  $\mu$ , 10～20  $\mu$ , 下地漆 50～120  $\mu$ , 漆器鉢では上から順に 10  $\mu$ , 10  $\mu$ , 10  $\mu$ , 20  $\mu$ , 下地漆 140  $\mu$  である。

# 5 石製品・その他

## A 石 製 品 (PL. 29)

- \* 1 は用途不明品。滑石製で長方形の一短辺の両角を落とした将棋駒形をなす。四周の稜を面取りし、全面を平滑に研磨するが、裏面には部分的に粗面を残す。上端中央に小孔を穿つ。孔の上縁には紐で懸垂した痕跡がある。全長 19.7 cm, 幅 14.7 cm, 厚さ 3.5 cm, 小孔径 0.6 cm, 重量 2296 g, 灰褐色土出土。これに類似するものとして中世のいわゆる<sup>ぬくめいし</sup>温石がある。温石とは滑石製の厚い長方形板の上方に小孔を穿つもので、火で熱して湯湯婆<sup>ゆたんぼ</sup>のように用いたとき
- \* れる。2 は裁頭円錐形の紡錘車。滑石製で側面がわずかに内湾し、中央上方より円孔を穿つ。側面との境を面取りし、全面を平滑に研磨する。上面径 2.2 cm, 下面径 4.5 cm, 厚さ 1.7 cm, 重量 41.1 g, SD1560 出土。

## B 鉄製品・鑄造関係遺物 (PL. 29)

- \* 3～5 は鉄釘。ともに断面長方形の脚の上端を叩きのばし折り曲げて釘頭とする。3：現存長さ 4.0 cm, 灰褐色粘質土出土。4：現存長さ 5.2 cm, 小土壙出土。5：現存長さ 3.8 cm, SG1504 出土。7 は鉄錠。材と材を継ぎとめるためのカスガイで隅丸のコ字形を呈する。断面方形の鉄製角棒の両端を折り曲げたもの。両足端を欠損する。横幅 7.45 cm, 現存縦幅 3.2 cm, SE1547 出土。6 は鉄錐子。海老錠の部品で厚さ 0.1 cm の板をコの字形に折り曲げ、別の長方形板を鍛接し四角筒形の胴部を作る。小口は片方のみ遺存し、長方形板を折り曲げて作
- \* っている。鍵を差し込む孔の形状は縁辺部を欠損するため不明である。現存長さ 6.3 cm, 径 1.6×1.5 cm。茶褐色土出土。8 は鞆羽口。炉側先端部の小片で先端がやや細くなる。先端部は火熱のため熔融し、筒部は灰黒色に変色する。現存長さ 5 cm, 復原外径 4 cm, 同内径 1.7 cm, 茶褐色粘質土出土。



## 6 植物遺体

### A 大形植物遺体 (PL. 30, 31)

流路 SD1525 や園池 SG1504 で植物の種子・核 (内果皮), 球果, 果実などが出土した。

#### 流路 SD1525 出土の植物遺体

流路 SD1525 の植物遺体は流路が大きく東へ曲る部分の西岸で, 木簡・木質遺物の出土した暗灰色粘土の土層より出土した。

QC27

オニグルミ (核半分)

*Juglans sieboldiana* MAX.

モモ (大小 2 個)

*Prunus persica* BATSCH.

ツバキ (果実 1 個)

*Camellia japonica* L.

QB26

ケヤキ (大形の葉 1 枚)

*Zelkova serrata* MAK.

QE26

8本の茎の小片を同質の茎1本で束ねたもの。断面をみると大形の髓が大部分をしめ, 外皮に直接して多数の管束が同一周上に一列にならぶ双子葉の草本ではないかと思われる。

#### 池 SG1504 出土の植物遺体

池 SG1504 の植物遺体は池の中心部の岸边近くで, 池の堆積土最下層の黒色粘土中で底石近くに出土した。特に水面巾が一番狭くなる東岸池底で多量のマツの球果を出土した。

PM29

クロマツ (球果 3 個)

*Pinus thunbergii* PARL.

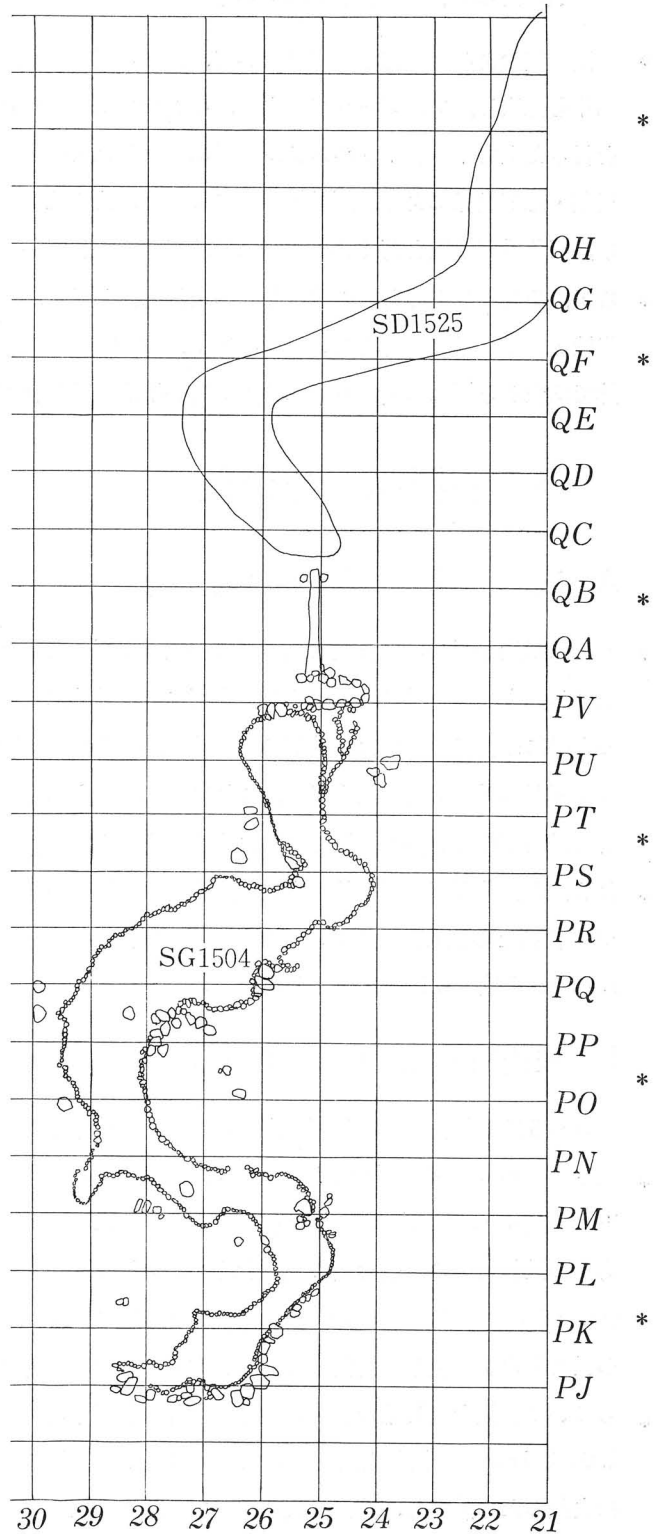


Fig. 45 植物遺体出土位置図

PP28

モモ (核の小片3個)

PO28

クロマツ (球果58個。うち26個は果片を失ない軸だけになっている。リス, ムササビなどに食害された

\* ものとみえる。)

モモ (小さな核半分のもの2個)

ウメ (1個) *Prunus mume* S. et Z.

センダン (核2個・核の破片5個・種子3個) *Melia azedarach* L.

この他「黄土人形」様の褐鉄鉱塊が4個出土した。

\* その他池内出土の資料

ヒルムシロ (外果皮つきの果実1個) *Potamogeton distinctus* BENN, ヘラオモダカ (種子1個) *Alisma canaliculatum* A. BR. et BOUCHE, ウメ (核の破片1個), ウツギ (蒴果) *Deutzia crenata* S. et Z., フジ属 (冬芽破片1個) *Wistaria* sp., ブドウ属 (種子断片1個) *Vitis* sp., ゴキヅル (種子半分3個) *Actinostemma lobatum* MAX., この他ヒメジソ (*Mosia* sp.) の類の

\* ようにみえる小種子1個などがある。

以上をみると, 食用となるものは, クルミ・モモ・ウメ・ブドウなどで, 薬用としてはセンダン・ウメがある。池沼の植物としては, ヘラオモダカ・ヒルムシロがあるが, スゲの類や, ホタルイの類はみえない。ゴキヅルは水辺をこのむウリ科の雑草である。モモは北の流路 SD 1525で出土したもののうち1個をのぞき, 亜球形で, 現在の品種とは異なる。出土した球果の

\* 状態などから考えて, 庭園内にクロマツが植えてあったと考えられなくもない。

## B 花 粉 分 析

池中最下層の黒色粘土において花粉分析を行ったところ, 花粉胞子化石が多量に含まれていた。特に *Pinus* (マツ属), *Cryptomeria* (スギ属) が多く, また水生の *Persicaria* (タデ属), *Gramineae* (イネ科), *Picea* (トウヒ属), *Tsuga* (ツガ属), *Quercus* (コナラ亜属), *Fagus* (ブナ属) など約40種類におよぶ。また池の上層の埋土の灰褐色粘質土ではマメ科のアズキ, ゴマ科のゴマ, タデ科のソバ, アブラナ科の一種など当時の栽培植物の花粉化石がみられた。

Tab. 10 出土植物遺体一覧表

種 類	出土部位	数量	習 性	万葉植物名
クロマツ ( <i>Pinus thunbergii</i> PARL.)	球 果	61	常緑針葉高木	松, 待, 麻都
モモ ( <i>Prunus persica</i> BATSCH.)	核 (内果皮)	5	落葉広葉低木	桃
ウメ ( <i>Prunus mume</i> S. et Z.)	核 (内果皮)	5	落葉広葉低木	宇米, 有米, 梅
センダン ( <i>Melia azedarach</i> L.)	核 (内果皮)	7	落葉広葉高木	相布, 阿布知
センダン ( <i>Melia azedarach</i> L.)	種 子	3	落葉広葉高木	安布知
ヒルムシロ ( <i>Potamogeton distinctus</i> BENN.)	果 実	1	多 年 草 (水 生 植 物)	多波美豆良
ヘラオモダカ ( <i>Alisma canaliculatum</i> A. BR. et BOUCHE.)	種 子	1	多 年 草 (水 生 植 物)	
ウツギ ( <i>Deutzia crenate</i> S. et Z.)	果 実	9	落 葉 低 木	宇能波奈
ゴキヅル ( <i>Actinostemma lobatum</i> MAX)	種 子	3	一 年 生 っ 草 (水 辺 植 物)	